新発田市埋蔵文化財調査報告　第65

新発田城跡　発掘調査報告書Ⅻ

第４・５・６地点

２０２１

新発田市教育委員会

新発田城跡　発掘調査報告書Ⅻ

第４・５・６地点

２０２１

新発田市教育委員会

例　　言

1　本報告書は、新潟県新発田市大手町６丁目２番（第４地点）及び大手町６丁目６番56（第５・６地点）に所在する新発田城跡（しばたじょうあと）の本発掘調査記録である。

2　本発掘調査は、陸上自衛隊新発田駐屯地施設増設（第４地点）及び新発田城址公園整備事業（第５・６地点）に先立つもので、東京防衛施設局長（第４地点：現地調査当時、現在は北関東防衛局に移管）及び新発田市長（第５・６地点）の委託を受けた新発田市教育委員会が調査主体となり、現地調査を昭和62年８月３日から８月７日（第４地点）、平成４年４月20日から４月23日（第５地点）、平成４年５月18日から５月21日（第６地点）にかけて実施した。

3　本発掘調査の経費は、第４地点については東京防衛施設局と新発田市が結んだ委託契約に基づき、現地調査及び基礎整理作業の100％を事業者である東京防衛施設局が負担した。また、第５・６地点の現地調査及び本書の作成費用については、全額を新発田市が負担した。

4　本書には、第６地点に隣接する位置で新発田市教育委員会が平成21年２月２日と２月３日に実施した、新発田城址公園表門内 排水対策工事の立会い結果を併せて掲載している。

5　遺物・記録類は、新発田市教育委員会が一括保管している。遺物の注記は「SJ」とし、地点名を「Ⅳ」・「Ⅴ」・「Ⅵ」とローマ数字で付記した。また、必要に応じグリッド・日付などを記した。

6　本書の編集は石垣義則（新発田市教育委員会）が行った。執筆は第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章１、第Ⅳ章１、第Ⅴ章１・４を鈴木暁（新発田市教育委員会）、第Ⅲ章２（瓦）を酒井瑞季（新発田市教育委員会）が担当し、残りを石垣が行った。また、本報告書掲載写真は、遺構を田中耕作・鶴巻康志（ともに現地調査当時新発田市教育委員会）が、遺物を石垣・酒井が撮影した。

7　出土遺物の図化作業・拓本・トレース及び挿図・図版の作成は、石垣・鈴木・酒井の指示のもと作業員が行った。

8　本書に掲載の地形図は、国土地理院発行1/50,000地形図「新発田」及び市作成の地形図であり、必要に応じて縮小している。方位記号は真北を示す。

9　土層説明の土色及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』（1995年版）を用いた。

10　図書館等（著作権法第31条第１項に規定する図書館等をいう）の利用者は、その調査研究の用に共するために、本報告書の全体について、複製することができる。

11　発掘調査から本書の作成にあたり、下記の個人・機関から御協力・御支援を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（順不同　敬称略）

新潟県教育庁文化行政課　東京防衛施設局（現地調査当時）　陸上自衛隊新発田駐屯地

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の遺跡

1　遺跡の位置と立地 …… 1

2　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 3

第Ⅱ章　調査の概要

1　調査に至る経緯と調査体制 …… 4

2　本発掘調査の経過 …… 5

第Ⅲ章　第４地点の調査

1　調査区の設定と遺構確認 …… 6

2　遺　　物 …… 7

第Ⅳ章　第５地点の調査

1　調査区の設定と遺構確認 …… 12

2　遺　　物 …… 13

第Ⅴ章　第６地点の調査

1　調査区の設定と基本土層 …… 14

2　遺　　構 …… 14

3　遺　　物 …… 16

4　隣接地 工事立会いの成果 …… 17

第Ⅵ章　ま　と　め …… 18

引用・参考文献 …… 19

報告書抄録 …… 巻末

挿　図　目　次

第１図　新発田城跡の位置 …… 1
第２図　新発田城の範囲とこれまでの発掘調査地点 …… 2
第３図　第４地点の調査範囲と基本土層 …… 6
第４図　第４地点出土の陶磁器 …… 8
第５図　第４地点出土の瓦（１） …… 9
第６図　第４地点出土の瓦（２） …… 10
第７図　第４地点出土の瓦（３） …… 11
第８図　第５・６地点の位置 …… 12
第９図　第５地点の平面図と基本土層 …… 13
第10図　第５地点出土の土器 …… 13
第11図　第６地点の平面図 …… 14
第12図　第６地点の基本土層と遺構断面図 …… 15
第13図　第６地点出土の土器・陶磁器 …… 16
第14図　表門内排水対策工事の立会い調査範囲と土層模式図 …… 17

表　目　次

表１　遺物観察表 …… 20

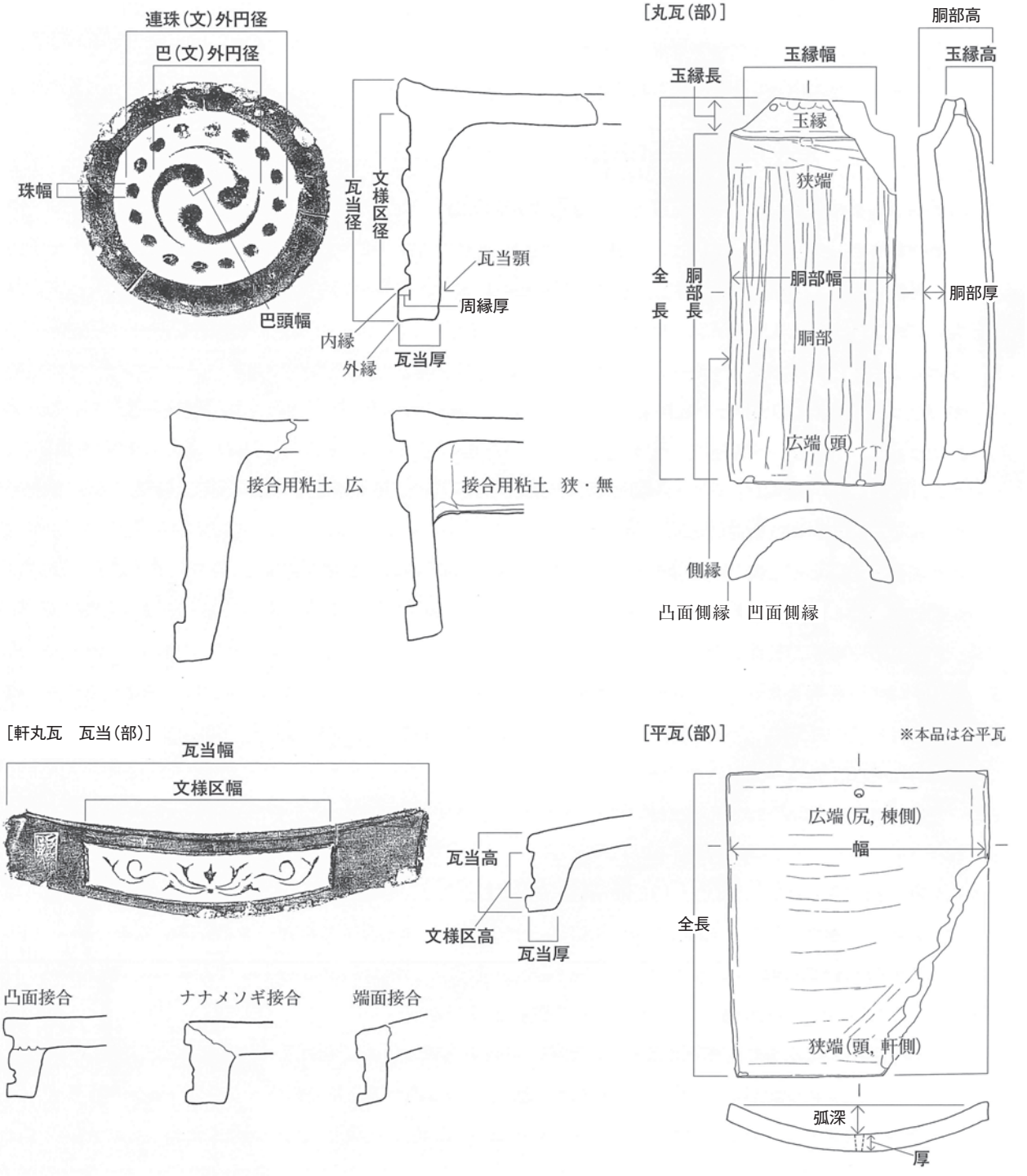
図　版　目　次

図版１　第４地点：作業風景、基本土層、石垣背面盛土
図版２　第５地点：調査区全景、基本土層、遺構、作業風景
図版３　第６地点：調査区全景、基本土層、Ｐ１～３、１～３号溝、作業風景
図版４　第４地点：陶磁器、瓦（１）
図版５　第４地点：瓦（２）
図版６　第５・６地点：土器・陶磁器

凡　　例

1　瓦の部位名称及び計測位置は，下図に示すとおりとする

瓦の部位名称（観察表記載　計測位置）



（新発田市教育委員会 2016 を一部改変）

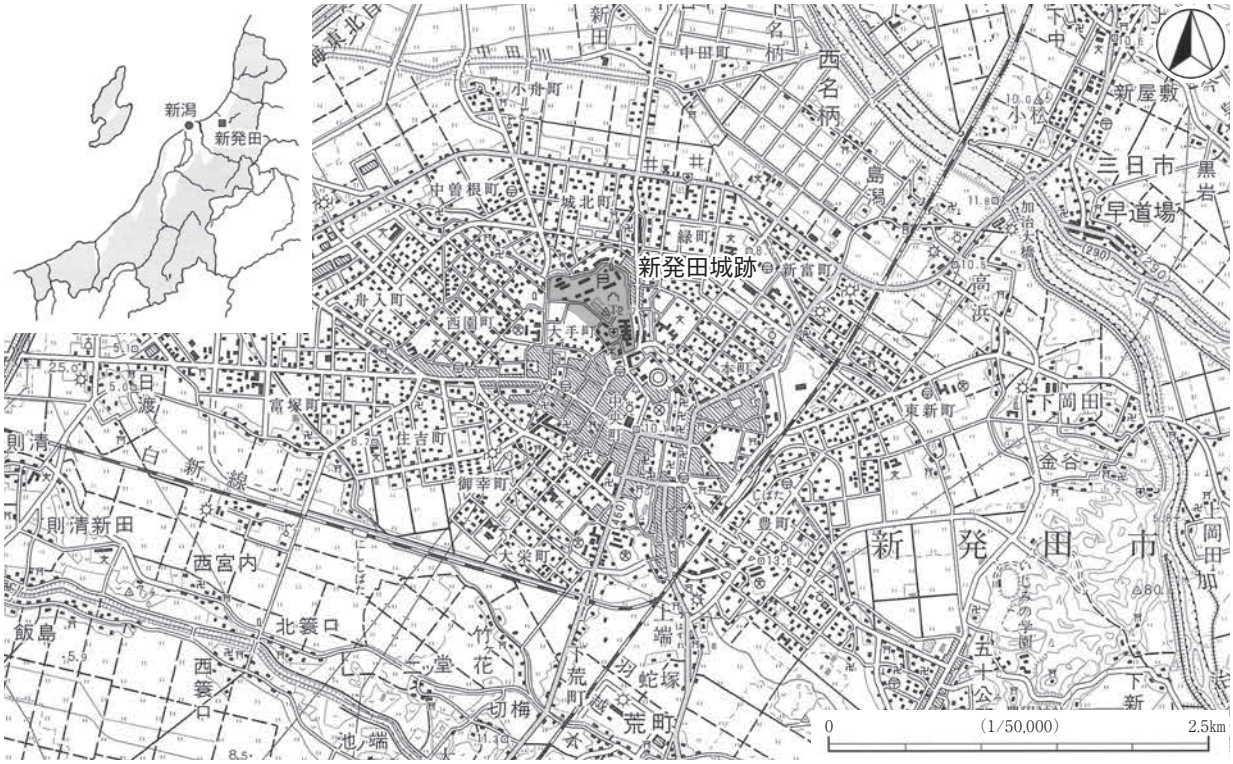
第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の遺跡

1　遺跡の位置と立地

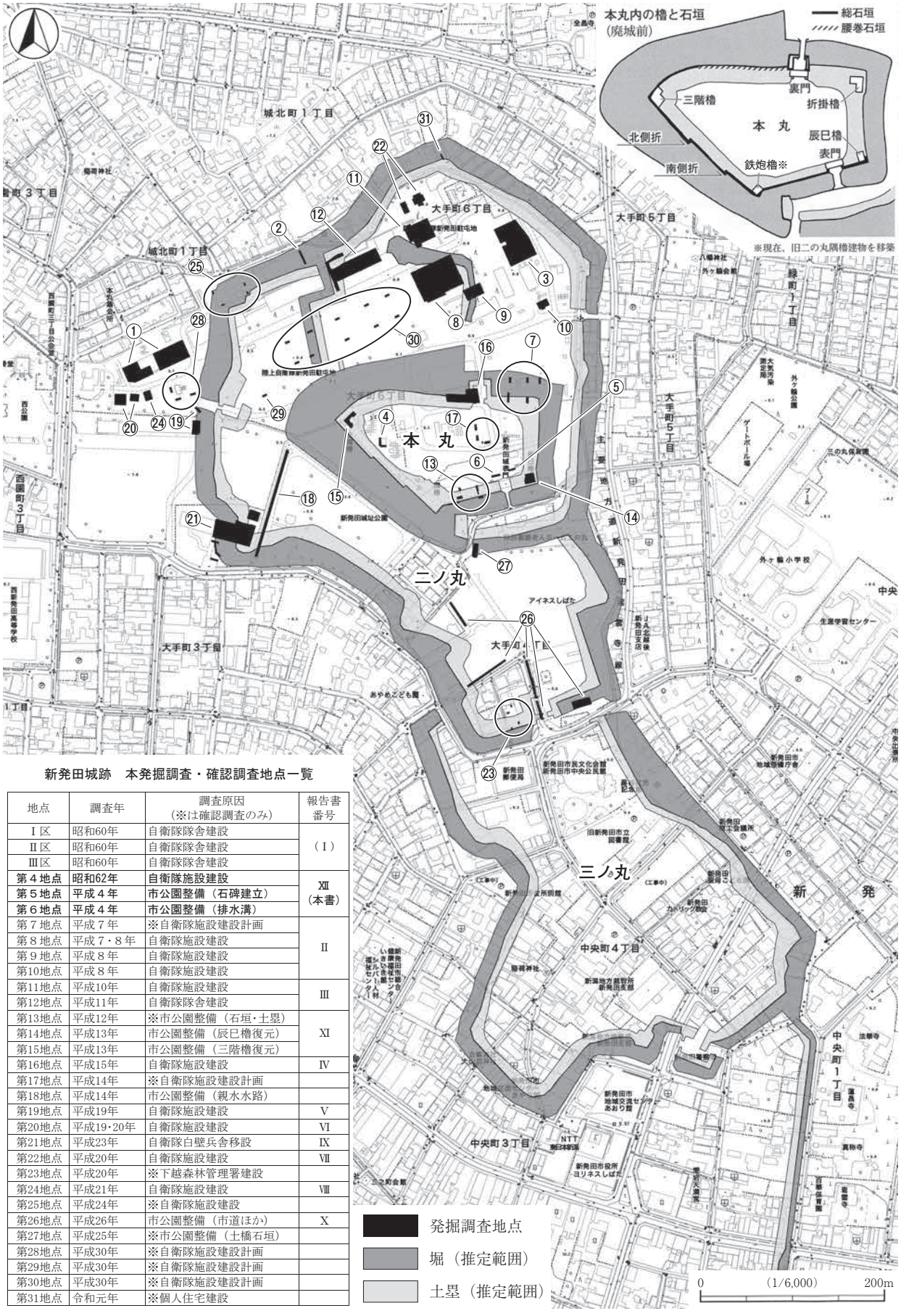
調査地の位置と立地　新潟県新発田市は新潟市の東方約25kmに位置し、面積が約533㎢、人口は約９万６千人の地方都市である。市街地は、新発田藩の城下町を中心に形成されており、その周囲には新発田川や太田川といった河川を利用した水田が広がる。市域は、新潟平野の一部をなす平野部と、東縁の五頭山地･櫛形山脈･飯豊山地により構成される。平野部は、東側の山地から流下する加治川水系の河川作用による台地･低地と、海岸線に平行な砂丘列のある海岸平野、及び潟湖の干拓地などにより形成される（国土地理院1993）。

本遺跡は加治川によって形成された扇状地の扇央部に位置する。南西に新発田川、北東には中田川などの小河川が流れ、扇状地の中でも小高い場所に立地している。この微高地は、城と同じく南東から北西へ延びており、新発田城は地形を活かして築城されたといえる。また、扇状地の外側には新潟砂丘が何列も連なり、近世以前には河川は海に直接注がずに砂丘列沿いを西流し、砂丘列の内側には広大な潟や湿地帯が形成されていた。新発田城は、北側に人の行き来が容易ではない河川や潟･湿地帯を天然の防御施設として取り込んで築城された、と読み解くことができる（高橋1979、小村1980b）。

今回報告する第４･５･６の各地点はいずれも新発田城跡の本丸内にあたる。本丸は、南側の表門を正面、北側の裏門を裏とした不整五角形の平面形で、江戸時代を通じて藩主の御殿が置かれていた。本丸の南側と西側は総石垣が巡り、北側は腰巻石垣が築かれた。北西隅には天守に相当する三階櫓が、表門の東西両側には鉄炮櫓と辰巳櫓の二層櫓、北東側には単層の折掛櫓が築かれていた。このうち第４地点は三階櫓の内側裾部に、第５地点と第６地点は表門の内側、御殿玄関に面した広場の位置にあたる。



第１図　新発田城跡の位置



新発田城跡　本発掘調査・確認調査地点一覧

地点	調査年	調査原因 (※は確認調査のみ)	報告書 番号
Ⅰ区	昭和60年	自衛隊隊舎建設	（Ⅰ）
Ⅱ区	昭和60年	自衛隊隊舎建設	
Ⅲ区	昭和60年	自衛隊隊舎建設	
第４地点	**昭和62年**	**自衛隊施設建設**	**Ⅻ（本書）**
第５地点	**平成４年**	**市公園整備（石碑建立）**	
第６地点	**平成４年**	**市公園整備（排水溝）**	
第７地点	平成７年	※自衛隊施設建設計画	Ⅱ
第８地点	平成７・８年	自衛隊施設建設	
第９地点	平成８年	自衛隊施設建設	
第10地点	平成８年	自衛隊施設建設	
第11地点	平成10年	自衛隊施設建設	Ⅲ
第12地点	平成11年	自衛隊隊舎建設	
第13地点	平成12年	※市公園整備（石垣・土塁）	Ⅺ
第14地点	平成13年	市公園整備（辰巳櫓復元）	
第15地点	平成13年	市公園整備（三階櫓復元）	
第16地点	平成15年	自衛隊施設建設	Ⅳ
第17地点	平成14年	※自衛隊施設建設計画	
第18地点	平成14年	市公園整備（親水水路）	
第19地点	平成19年	自衛隊施設建設	Ⅴ
第20地点	平成19・20年	自衛隊施設建設	Ⅵ
第21地点	平成23年	自衛隊白壁兵舎移設	Ⅸ
第22地点	平成20年	自衛隊施設建設	Ⅶ
第23地点	平成20年	※下越森林管理署建設	
第24地点	平成21年	自衛隊施設建設	Ⅷ
第25地点	平成24年	※自衛隊施設建設	
第26地点	平成26年	市公園整備（市道ほか）	Ⅹ
第27地点	平成25年	※市公園整備（土橋石垣）	
第28地点	平成30年	※自衛隊施設建設計画	
第29地点	平成30年	※自衛隊施設建設計画	
第30地点	平成30年	※自衛隊施設建設計画	
第31地点	令和元年	※個人住宅建設	

第２図　新発田城の範囲とこれまでの発掘調査地点

2　周辺の遺跡と歴史的環境

新発田城は新発田藩の初代藩主･溝口秀勝の入封に伴い、慶長７(1602)年に築城が開始され、承応３(1654)年、三代藩主･宣直のときに完成したと伝えられる。明治４(1871)年に新発田藩が廃止となるまで、藩の政治的･軍事的な中心地であり続けた。新発田市教育委員会では、陸上自衛隊新発田駐屯地内や新発田城址公園の整備、三階櫓･辰巳櫓の復元などに関連して、新発田城跡で21箇所以上の本発掘調査を実施している。

新発田城築城以前の様子　これまでの発掘調査の結果、平安時代前期の集落が存在したと判明している。検出された掘立柱建物や溝、井戸などから、土師器･須恵器･灰釉陶器などが出土している。

中世には、有力国人である新発田氏の本拠地であったと推定されている。新発田氏は、加地荘の地頭である有力御家人の佐々木氏の分流の一つで、室町時代頃には同族で本家筋の加地氏が市域の北東部、同族の竹俣氏が市域の東部、そして新発田氏が新発田城の場所を含む市域の西部を支配するようになったと言い伝えられている。戦国時代末期の新発田氏当主である重家は、有力な武将として上杉家の下で活躍したが、謙信の跡目争いに勝利した上杉景勝と後に対立し、７年におよぶ抗争の末、天正15(1586)年に新発田氏は滅亡した(小村1980a)。

この新発田氏の本拠地と伝えられるのが、現在の新発田城跡の北側部分である。この範囲は、江戸時代の古文書や絵図に「古丸」などと記され、絵図には四角に廻らされた堀が描かれており、この場所が新発田氏の館跡だと伝えられてきた(小村1980b)。実際にこの箇所を発掘調査した結果、中世後期の堀と多くの柱穴や井戸を検出したことから、堀に囲まれた館の存在が推察される。併せて、室町時代初期から戦国時代の所産と考えられる土器･陶磁器が多く出土した。茶道具や中国産磁器、土師質土器皿などが、質･量ともに豊富で、伝承どおり新発田氏の館跡と考えられる。土器･陶磁器の年代からみて、館は鎌倉時代初期から戦国時代の終わり頃まで継続したと考えられ、特に鎌倉時代末から室町時代前半の遺構･遺物が充実し、新発田氏の勢力拡大の様子がうかがえる(新発田市教育委員会1997)。

また、この時代になると新発田氏の名が文書類に登場するようになり(阿部1980)、有力国人としての基盤が確立していった時期といえるだろう。

新発田城の築城と変遷　新発田城の変遷については『新発田城跡発掘調査報告書Ⅺ』(新発田市教育委員会2016)などで詳述しており、ここでは概略を記す。

慶長３(1598)年、豊臣秀吉の命で上杉景勝が会津へ移り、越後には堀秀治が入る。この与力大名として溝口秀勝が、加賀･大聖寺から越後･蒲原郡へ６万石で入封した。新発田重家の館があった新発田を拠点に定め、領内整備と築城に着手し、承応３(1654)年、三代藩主･宣直の時に完成した(小村1980c)。

しかし、完成からわずか14年後の寛文８(1668)年に発生した火災で城内のほとんどの建物を焼失し、その後の大地震も影響し壊滅的な被害を受けた。藩では再建に取り組み、復興したのは元禄13(1700)年のことであった(小村1980c)。その後も火災や大雨、地震などの度重なる被害を受け、その都度再建･補修が行われた。

明治維新後の廃藩置県を経て新発田城は廃城となり、城内の屋敷や櫓、門など多くの建物が解体された。江戸時代の建物として現存するのは、本丸表門と旧二の丸隅櫓(昭和35年に本丸の鉄炮櫓の位置に移築)の２棟で、いずれも国の重要文化財(建造物)に指定されている。また、平成16年には本丸の三階櫓と辰巳櫓が伝統的な木造建築で復元され、新たな市のシンボルとして親しまれている。

明治時代になると新発田城は陸軍省の所管となり、歩兵第３連隊第２大隊(後の歩兵第16連隊)の営所のほか、病院の敷地などになった。これに伴い、兵舎等の建物が建設され、新たな土地利用がなされることになった。

第Ⅱ章　調査の概要

1　調査に至る経緯と調査体制

第４地点と第５地点･第６地点では事業者や調査年度が異なるため、個別に経緯を記述する。

第４地点　昭和62年２月に陸上自衛隊新発田駐屯地（以下、駐屯地）が新発田市教育委員会（以下、市教委）に対し、駐屯地内で施設を増設する計画を伝えた。工事は同年内の施工を予定しているとのことだったが、同所は新発田城跡の本丸に位置することから市教委では事前の発掘調査が必要であると回答した。両者は協議を重ね、同年７月から８月に現地調査を行うことで合意した。また、駐屯地側の申し出で発掘の掘削作業の一部は自衛隊員があたること、消耗品や写真の印刷現像については事業者側が直接対応することとなった。以上を受け、昭和62年７月15日付け施東第5598号（TCP）で東京防衛施設局長（当時）からの発掘調査の委託依頼により、同年７月20日に新発田市長との間で発掘調査委託契約を締結した。また、駐屯地業務隊は文化財保護法第57条の３第１項の「埋蔵文化財発掘の通知」を同年４月21日付け新発田駐業第388号で文化庁長官へ通知し、市教委は４月27日付け教社第40号で新潟県教育委員会教育長へ進達した。市教委では文化庁長官に同法第98条の２第１項による発掘調査の着手を７月６日付け教社第144号で通知し、８月３日より現地作業に入った。また、これに関して８月12日に遺物発見届及び埋蔵文化財保管証を提出している。現地調査終了後に遺物の水洗･注記･分類などの基礎整理作業は行ったが、別事業の緊急を要する調査が発生するなどしたため、本遺跡の本格整理作業と報告書作成は当面、実施し得なくなった。このため、これらの作業は一旦中止し、この費用を減額して清算するものとして、昭和63年２月９日付け教社第307号で東京防衛施設局長に対して実績報告を行った。

第５地点　平成４年３月に、表門内側の公園敷地に石川県加賀市との友好都市締結記念の石碑を建立する計画が明らかとなった。周知の埋蔵文化財包蔵地である同所は、工事の事前に本発掘調査が必要であることから、事業担当である新発田市国際交流室（当時）と協議した結果、同年４月に本発掘調査を行うことで合意した。これにより、新発田市長は文化財保護法第57条の３第１項の「埋蔵文化財発掘の通知」を同年４月３日付け教生第２号で文化庁長官へ通知し、市教委は同日付け教生第５号で新潟県教育委員会教育長へ進達した。市教委では文化庁長官に同法第98条の２第１項による発掘調査の着手を４月４日付け教生第６号で通知し、４月20日より現地作業に入った。また、これに関して４月27日に遺物発見届及び埋蔵文化財保管証を提出した。現地調査終了後に遺物の水洗･注記･分類などの基礎整理作業を実施した。

第６地点　本丸表門内側の石碑建立（第５地点）に伴い、その周辺の排水対策として、急遽集水桝の設置工事とこれに先立つ本発掘調査の必要が生じ、新発田市長は文化財保護法第57条の３第１項の「埋蔵文化財発掘の通知」を同年４月14日付け教生第20号で文化庁長官へ通知した。また、市教委では文化庁長官に同法第98条の２第１項による発掘調査の着手を４月14日付け教生第19号で通知し、第５地点の石碑建立後の５月８日より現地作業に入った。これに関して５月26日に遺物発見届及び埋蔵文化財保管証を提出している。現地調査終了後に遺物の水洗･注記･分類などの基礎整理作業を実施した。

隣接での工事立会い　第６地点に隣接する位置で、新発田城址公園の整備に伴う表門内排水対策工事を行い、掘削幅１ｍ以内と小規模な掘削のため、立会い調査を実施した。

（立会い期間：平成21年２月２日～２月３日　面積：約27㎡）

調査体制

昭和62年度（本発掘調査：第４地点）

調査主体	新発田市教育委員会（教育長　渡辺　秀晃）		
監理	細野　一二（社会教育課長）	調査担当者	田中　耕作（社会教育課　学芸員）
総括	宮崎　勝英（社会教育課　課長補佐）	庶務	高橋　龍夫（社会教育課　係長）

平成４年度（本発掘調査：第５・６地点）

調査主体	新発田市教育委員会（教育長　渡辺　秀晃）		
監理	加藤　亮　（生涯教育課長）	調査担当者	田中　耕作（生涯教育課　学芸員）
総括	山口　栄治（生涯教育課　参事）	調査員	鶴巻　康志（生涯教育課　学芸員）
	五十嵐憲男（生涯教育課　課長補佐）	庶務	久志田正弘（生涯教育課　係長）

令和２年度（整理作業）

調査主体	新発田市教育委員会（教育長　工藤　ひとし）	調査担当者	石垣　義則（文化行政課　文化財技師）
監理	平山　真　（文化行政課長）	調査員	鈴木　暁　（文化行政課　主任）
総括	小林　大作（文化行政課　課長補佐）	調査員	酒井　瑞季（文化行政課　文化財技師）
		庶務	渡邊美穂子（文化行政課　埋蔵文化財係長）

令和３年度（印刷・刊行）

調査主体	新発田市教育委員会（教育長　工藤　ひとし）		
監理	平山　真　（文化行政課長）	調査担当者	石垣　義則（文化行政課　文化財技師）
総括	杉山　隆　（文化行政課　課長補佐）	庶務	渡邊美穂子（文化行政課　埋蔵文化財係長）

２　本発掘調査の経過

第４地点　昭和62（1987）年８月３日～８月７日　　現地調査に着手する。既存の施設を中心に、幅３ｍの調査区をＬ字状に設定する。人力で掘削を行い、調査区には近世の遺物とともに近代以降のガラスや陶磁器を含む層が厚く存在し、攪乱が深くまで達していることが判明する。北半ではサブトレンチを掘削した。地表下80cmまでは攪乱が続き、その下には炭化物を多く含む層があり、地山に達した。調査区壁面の土層を観察した結果、調査域全体が攪乱されているとの判断に至った。並行して調査区及び周辺の平面図を平板測量で作図し、断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。以上で調査を終え、機材を撤収して現地調査を終了した。

第５地点　平成４（1992）年４月20日～４月23日　　機材を搬入し、現地調査に着手する。トレンチ状の調査区を設定し、人力で掘削を行う。表土を取り除いた深さ25cmで遺構確認を行うも、空き缶やビニール、コンクリート片を含む攪乱が大半を占めた。さらに30cmほど掘り下げると、硬くしまった面に達する。調査区の西側は攪乱が著しいため、東端の４区のみを深掘りする。その結果、深さ150cmの地点で砂層の地山となる。この面で土坑状の落ち込みを検出した。並行して調査区及び周辺の平面図を平板測量で作図し、断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。以上で調査を終え、機材を撤収して現地調査を終了した。

第６地点　平成４（1992）年５月18日～５月21日　　機材を搬入し、現地調査に着手する。トレンチ状の調査区を設定し、人力で掘削を始める。深さ20cmで上水道管が見つかったため、調査区の東側から1.5～３ｍの範囲は掘り下げを断念した。暗灰色土上面で遺構確認を行い、ピットを検出した。さらに10cmほど掘り下げると青灰色シルトの地山に達した。この地山上面で遺構を検出し、溝から中世の遺物が出土した。調査区及び周辺地形を平板測量で作図し、断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。以上で現地調査を終えた。

整理作業　現地調査終了後に、遺物の水洗や注記などを実施した。本格的な整理作業及び報告書作成は令和２（2020）年度に実施した。遺物は実測・撮影・観察表作成などを、現場記録類は整合確認、図面の合成を実施した。各図面をトレースして図版版下を作成し、令和３年度に原稿執筆を完了し、報告書を印刷・刊行した。

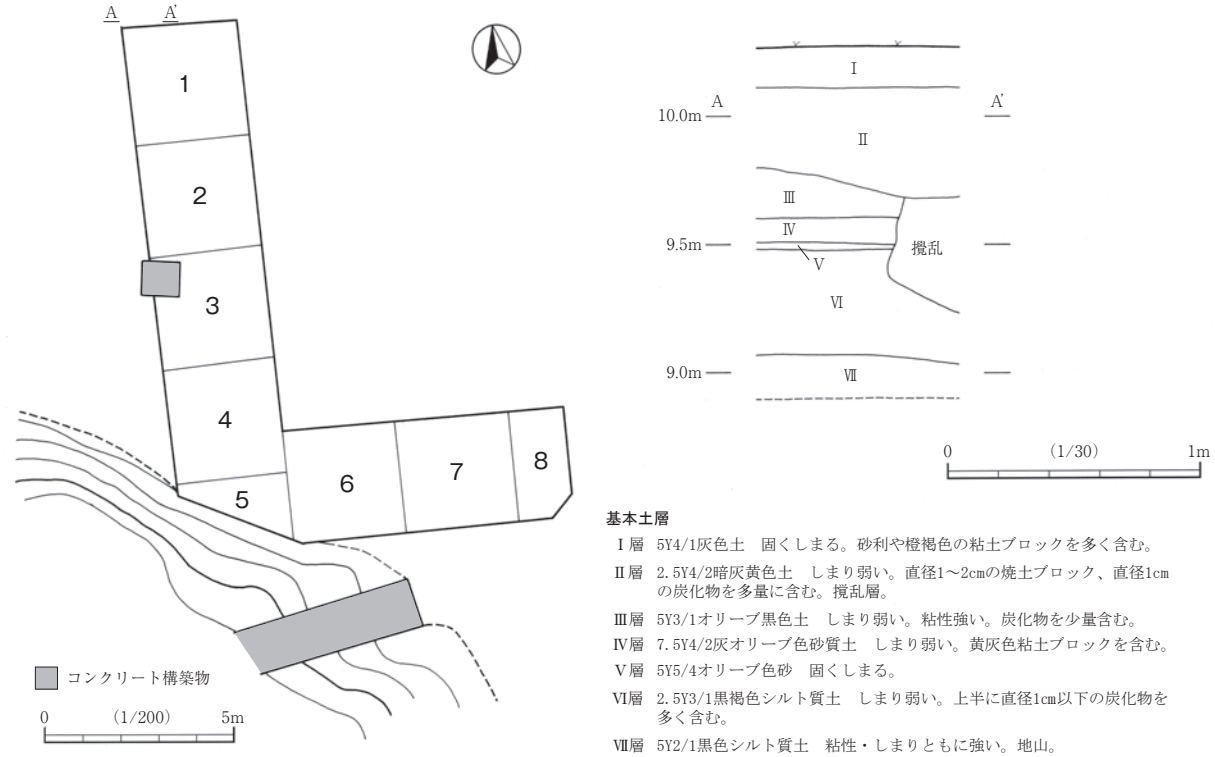
第Ⅲ章　第４地点の調査

１　調査区の設定と遺構確認

調査区の設定（第３図左）　第４地点は本丸の南西辺に位置する石垣背面盛土の裾部にあたる。今回は新設する施設の基礎部分について発掘調査を実施した。調査区は、石垣背面盛土に接する箇所で直角に折れる幅３ｍのＬ字状に設定した。北側から３ｍごとに区切り、１～８グリッドと呼称した。

基本土層（第３図右）　調査区北端部、１グリッドの北壁で土層観察を行った。表土（Ⅰ層）は砕石や粘土のブロックを多く含む現代の整地層である。Ⅱ層は焼土ブロックや炭化物を部分的に多く含む。近世の瓦とともに近代以降の陶磁器片やガラスを多く含み、攪乱層と判断できる。Ⅲ～Ⅵ層は色調や土質、混入物の差異から分層した。いずれの層も無遺物層で時期は不明である。Ⅲ層上面から掘り込まれる落ち込みがあり、瓦を多く含む。他の遺物は出土しないが、大量の瓦を含むことから、城郭建物廃絶時の明治初期の攪乱と考えた。また、Ⅴ層はしまりの強い砂層である。Ⅶ層は黒味がかるシルト質土で、しまりが強く、地山とした。

遺構確認　攪乱土のⅡ層まで全体を掘り下げ、その下のⅢ層及びⅣ層上面･Ⅴ層上面をそれぞれ遺構確認面と推定して精査を行ったが遺構は一切検出されなかった。５グリッドでは、Ⅲ層上面で遺構らしき平面プランを検出したが、プランが不整形であり、その性格が判然としないことから、サブトレンチを設定し掘削した。その結果、同プランは土坑などの掘り込みではなく、石垣背面盛土の斜面堆積を平面的に検出したものと判明した。このサブトレンチの土層を観察すると、黒褐色土とシルトブロックを多く含む土が同じ傾斜を持つ斜面堆積であることが分かった（図版１）。その傾斜角度は、現況の石垣背面盛土の傾斜に近似しており、その検出位置からみても、同盛土の裾部にあたると考えられる。但し、遺物などの出土は無く、明確な時期を決定する根拠を欠く。



基本土層

Ⅰ層　5Y4/1灰色土　固くしまる。砂利や橙褐色の粘土ブロックを多く含む。

Ⅱ層　2.5Y4/2暗灰黄色土　しまり弱い。直径1～2cmの焼土ブロック、直径1cmの炭化物を多量に含む。撹乱層。

Ⅲ層　5Y3/1オリーブ黒色土　しまり弱い。粘性強い。炭化物を少量含む。

Ⅳ層　7.5Y4/2灰オリーブ色砂質土　しまり弱い。黄灰色粘土ブロックを含む。

Ⅴ層　5Y5/4オリーブ色砂　固くしまる。

Ⅵ層　2.5Y3/1黒褐色シルト質土　しまり弱い。上半に直径1cm以下の炭化物を多く含む。

Ⅶ層　5Y2/1黒色シルト質土　粘性・しまりともに強い。地山。

第３図　第４地点の調査範囲と基本土層

１～４グリッドでは、上述のⅢ層上面からの攪乱が大きく広がり、遺構を検出できなかった。また、東側の６～８グリッドでは、戦前の旧陸軍施設や現在の自衛隊施設建設による攪乱が顕著で、こちらでも遺構は確認できなかった。

２　遺　　物

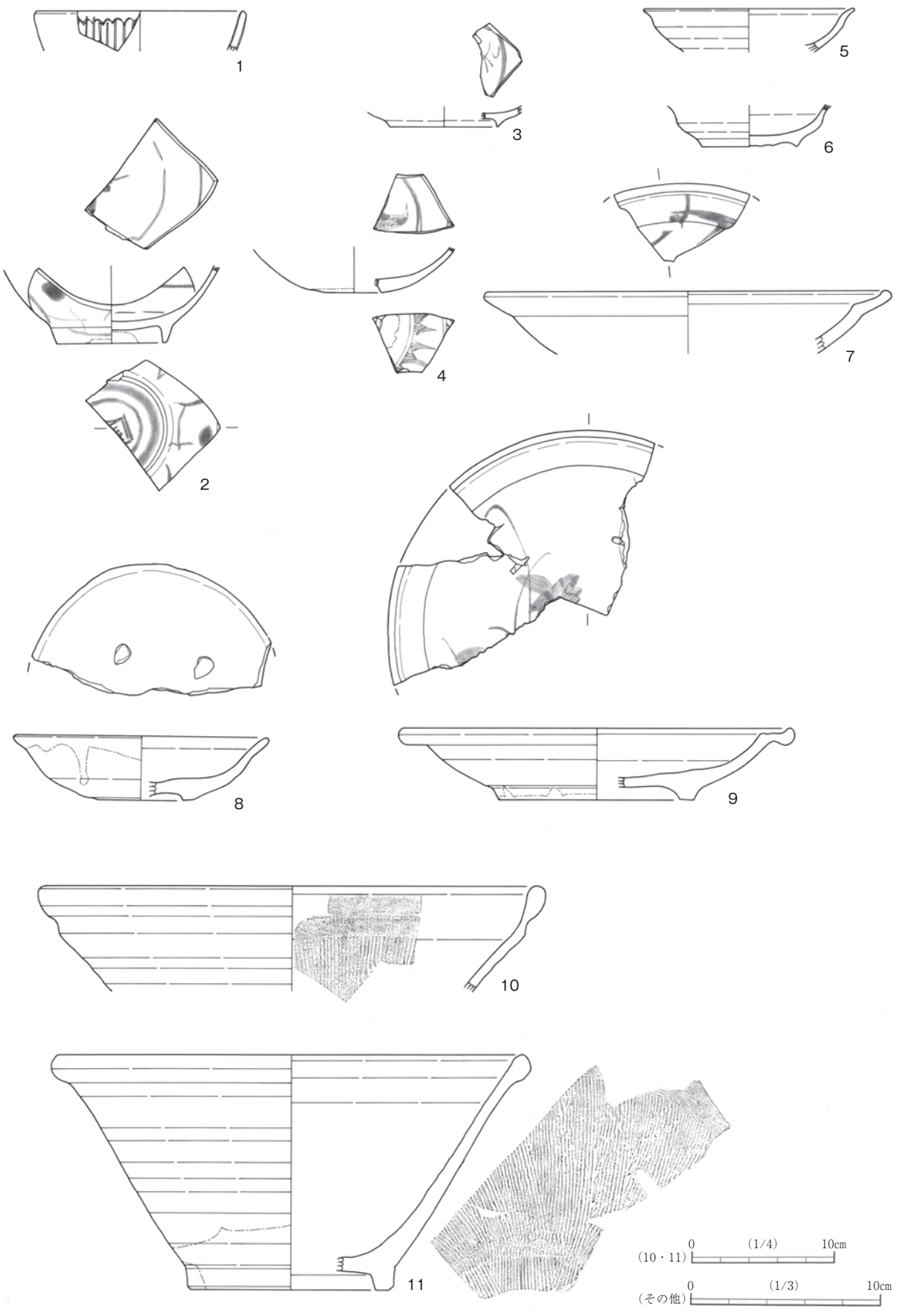
出土遺物には中世から近世の陶磁器･瓦があり、その量は、陶磁器が浅箱１箱分（浅箱の内寸：54㎝×34㎝×10㎝）、瓦が浅箱８箱分である。なお、瓦のほとんどが燻して表面を黒く仕上げた黒瓦だが、一部、施釉による赤瓦もある。遺物の多くは攪乱からの出土である。本稿では、遺物の時期や形状が分かるものを中心に抽出し、図化した。

陶磁器（第４図、図版４）　１は青磁の線描蓮弁文碗である。口径が11.0㎝と、一般的な碗より小さく、小碗の部類に入る。上田分類（上田1982）のＢ－Ⅳ類にあたり、時期は15世紀後半から16世紀前半とみられる。２は青花の碗である。文様は花卉文が描かれ、見込みには円形を表現した線刻が施される。また、高台内には二重圏線が引かれ、その内側には二重方形枠内に変形字を入れた銘が染付けされる。釉調は青味がかった透明釉である。高台畳付には釉薬は施されず、釉着を防ぐための砂が付着する。時期は16世紀末から17世紀前半とみられる。３･４は青花の皿である。３は小野分類（小野1982）の皿Ｂ２群と考えられ、内面には文様が描かれるが、そのモチーフは不明である。高台畳付には、釉着を防ぐための細砂が付着する。時期は16世紀後半と考えられる。４は小野分類の皿Ｃ群にあたり、底部は碁笥底を呈し、高台畳付の釉薬は削り取られている。見込みには花鳥、外面には芭蕉葉文が描かれている。時期は15世紀後葉から16世紀中葉とみられる。

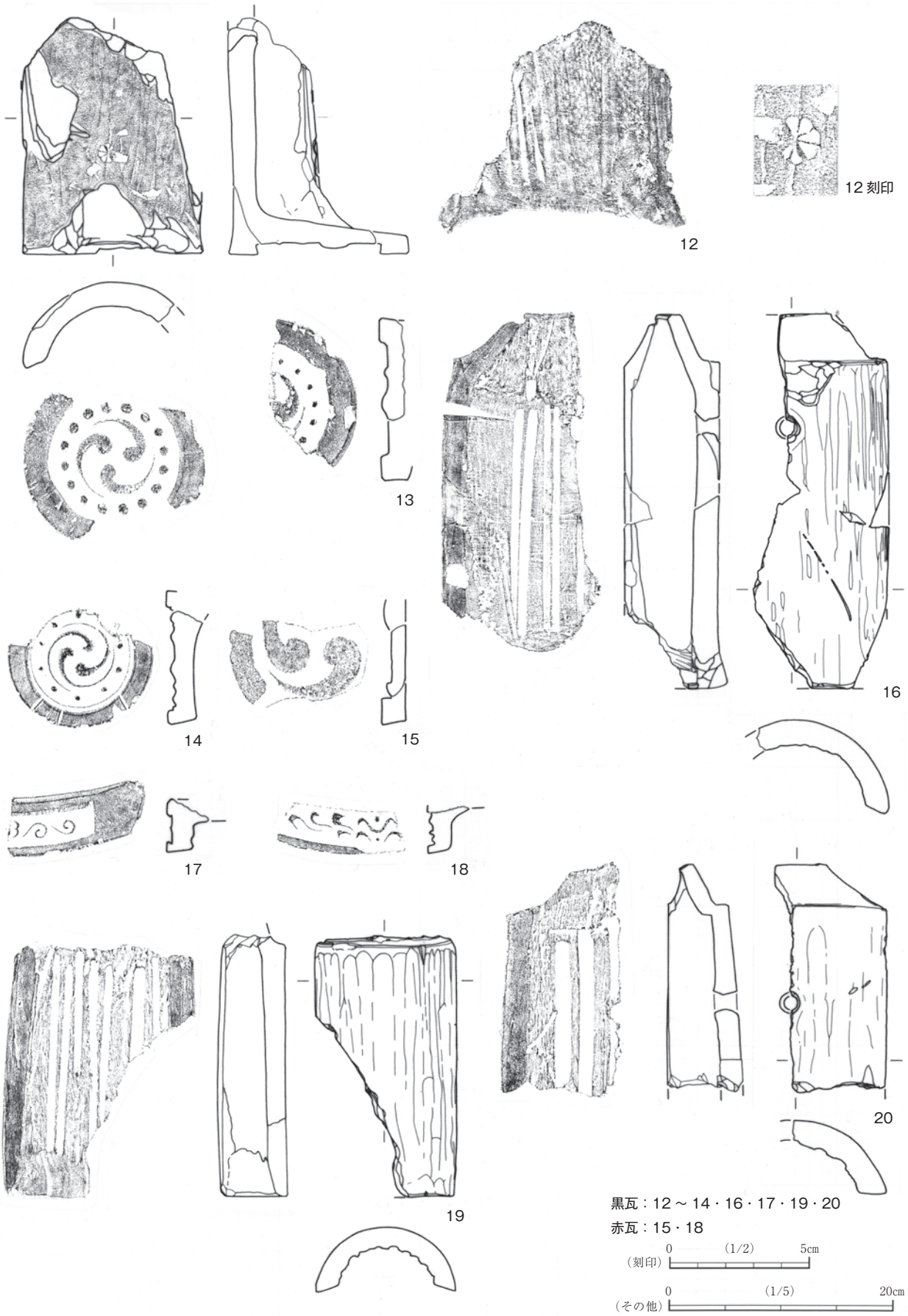
５･６は瀬戸美濃の端反皿で、全面に明るい緑色の灰釉が施釉される。６の付け高台内には輪ドチ痕が残る。いずれも大窯第１段階（1480～1530年頃）に比定できる（愛知県史編さん委員会2007）。

７は肥前陶器の皿である。口径が21.0㎝で、口縁部が折縁を呈する。内面には鉄絵で文様が描かれるが、そのモチーフは不明である。時期は17世紀前半と考えられる。８も肥前陶器の皿である。口縁部は反り、高台はわずかに削り出される。釉薬は白濁した藁灰釉で、高台部分には掛けられない。見込みには胎土目積みの痕跡が認められ、時期は大橋Ⅰ期（1580～1600年代）に比定できる（大橋1989）。９～11は産地不明の陶器である。９は皿で、化粧土が施された後に鉄絵で草文が描かれる。見込みには焼台（桔梗台）の痕が認められる。時期は19世紀後半以降と考えられる。10･11は玉縁状口縁を有する擂鉢である。10の内外面には鉄釉が厚く掛けられている。11にも鉄釉が掛けられているが、高台は無釉である。見込みには焼台を介さず、直接重ね焼きした痕跡が認められる。いずれも時期は19世紀後半以降と考えられる。

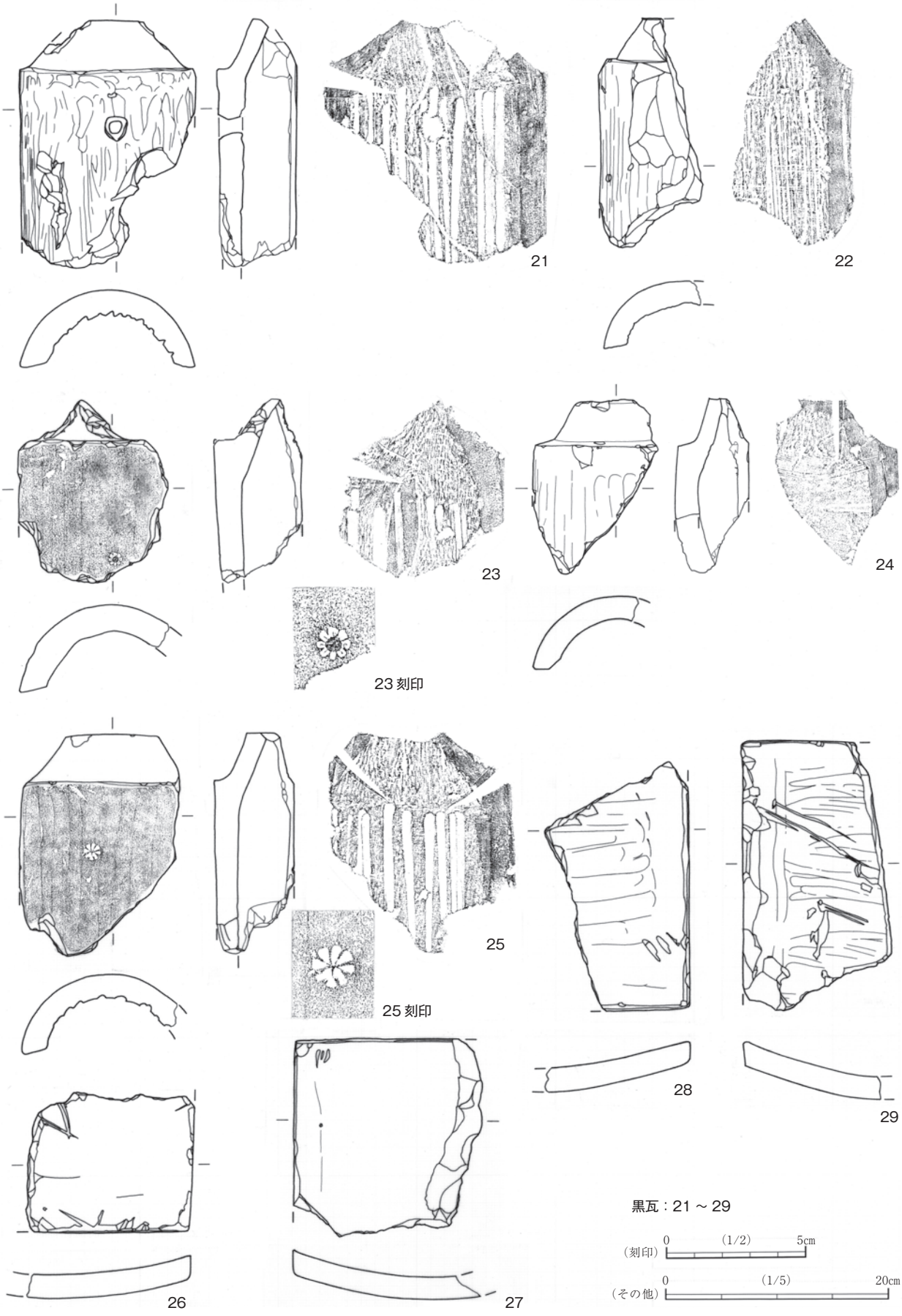
瓦（第５～７図、図版４･５）　12～16は軒丸瓦で、15が赤瓦、その他が黒瓦である。12･13は、いずれも連珠三巴文で珠数が16である。この瓦当文様は、三巴文外円径／連珠文外円径の比率と、連珠文珠幅と巴頭幅の大小により２種４細分（ａ種①･②、ｂ種①･②）されている（渡邊2016）。12は三巴文外円径／連珠文外円径の比率が69％で、珠幅は巴頭幅より小さく、その差が0.6cm であることから、ｂ種①に分類される。瓦当部と丸部の接合には、瓦当裏面全体に接合用の粘土を広く貼りつける方法が用いられている。また、丸部凸面は、ケズリ後に縦方向のミガキ調整を行い、釘穴と「八弁花」の刻印がある。丸部凹面は、布目（刺縫い圧痕）･タタキがみられる。13は瓦当片で、珠幅が巴頭幅より小さく、その差は1.2cm と極端であることから、ｂ種②と考えられる。丸瓦との接合部には、カキヤブリ痕（櫛歯状工具による平行沈線）がみられる。14は、連珠三巴文で珠数が10である。15は三巴文で巴は右巻きである。16は軒丸瓦の瓦当が欠損したものである。瓦当との接合部には、カキヤブリ痕がみられる。また、丸部凸面は、ケズリ後に縦方向のミガキ調整を行っており、釘穴がある。丸部凹面は、コ



第4図　第４地点出土の陶磁器



第5図　第４地点出土の瓦（１）



第６図　第４地点出土の瓦（２）

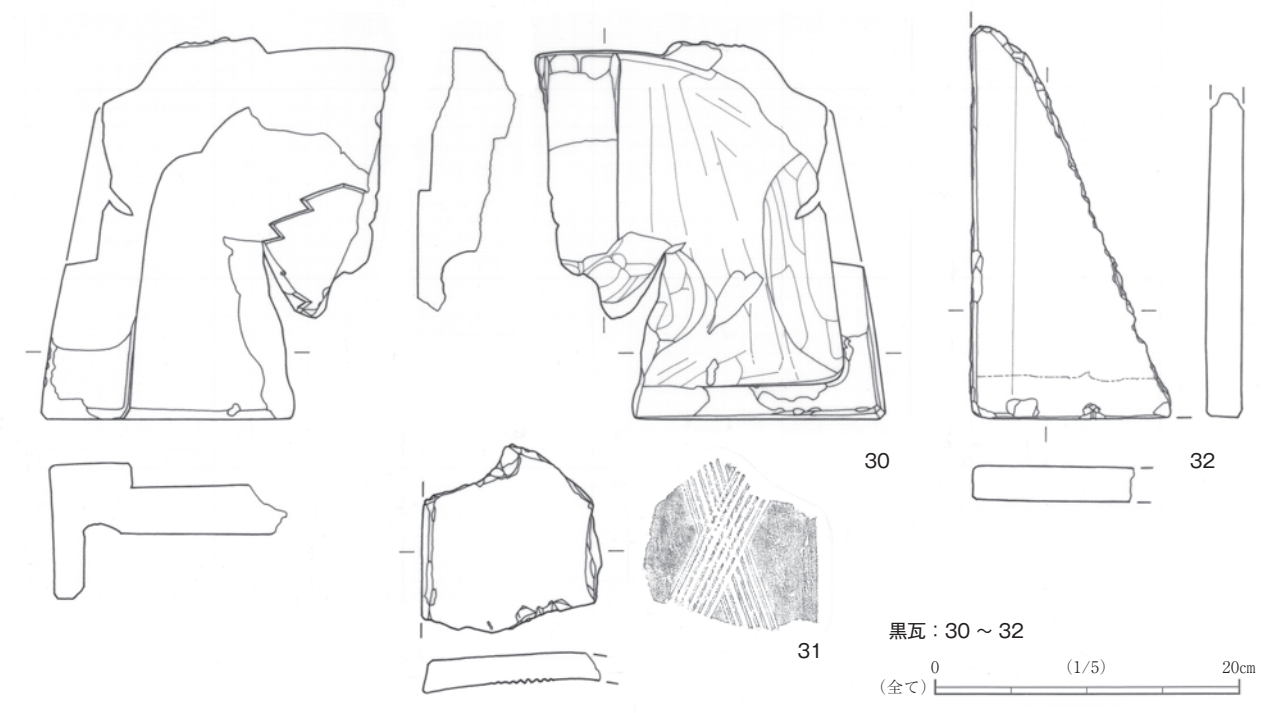
ビキB（森田1984）・布目（刺縫い圧痕）・タタキがみられる。

17・18は軒平瓦で、それぞれ黒瓦・赤瓦である。17は８の字状文である。子葉を欠くことから、ｂ種の可能性がある。瓦当部と平部にはナナメソギ接合が用いられ、接合部にはカキヤブリ痕がみられる。18は菊文である。瓦当部と平部には凸面接合が用いられ、接合部にはカキヤブリ痕がみられる。

19～25は丸瓦で、ほとんどが黒瓦である。25のみ、灰白色の無釉の瓦である。凸面の刻印「八弁花」は、これまで新発田城跡から出土した瓦では、黒瓦のみに押されていることから（新発田市教育委員会2008・2015・2016）、25も黒瓦の可能性が高い。19～25は、凸面にはいずれもケズリ後に縦方向のミガキ調整を行っている。凹面にはほとんどに布目（刺縫い圧痕）・タタキがあるが、24のみ刺縫い圧痕のない布目でタタキもみられなかった。また、20・21には釘穴・吊り紐痕、22・24にはコビキB、23には「芯持ち八弁花」の刻印がみられる。なお、玉縁側縁から胴部側縁上端にかけての調整方法に、「玉縁側縁と胴部側縁上端を面取りするもの」と「玉縁側縁のみを面取りするもの」の２種類が確認された。今回の掲載資料では、16・21・22・24・25が前者、20が後者にあたる。

26～29は平瓦で、全て黒瓦である。凸面は、ほとんどにナデ調整がみられるが、29のみ無調整である。凹面は、いずれもミガキ調整を行っている。

30～32は特殊瓦で、いずれも黒瓦である。30は新発田藩主溝口氏の家紋である五階菱を付した鬼瓦である。31は熨斗瓦である。凸面は無調整で、凹面にはミガキ調整と平行沈線が施されている。32は海鼠瓦である。凸面・凹面ともにミガキ調整が行われている。表面側縁から2.4cm 内側に側縁と並行した刻線があり、漆喰を乗せる際の目安と考えられている（金子1999）。また、側面には釘で固定したとみられる痕跡がある。



第７図　第４地点出土の瓦（３）

第Ⅳ章　第５地点の調査

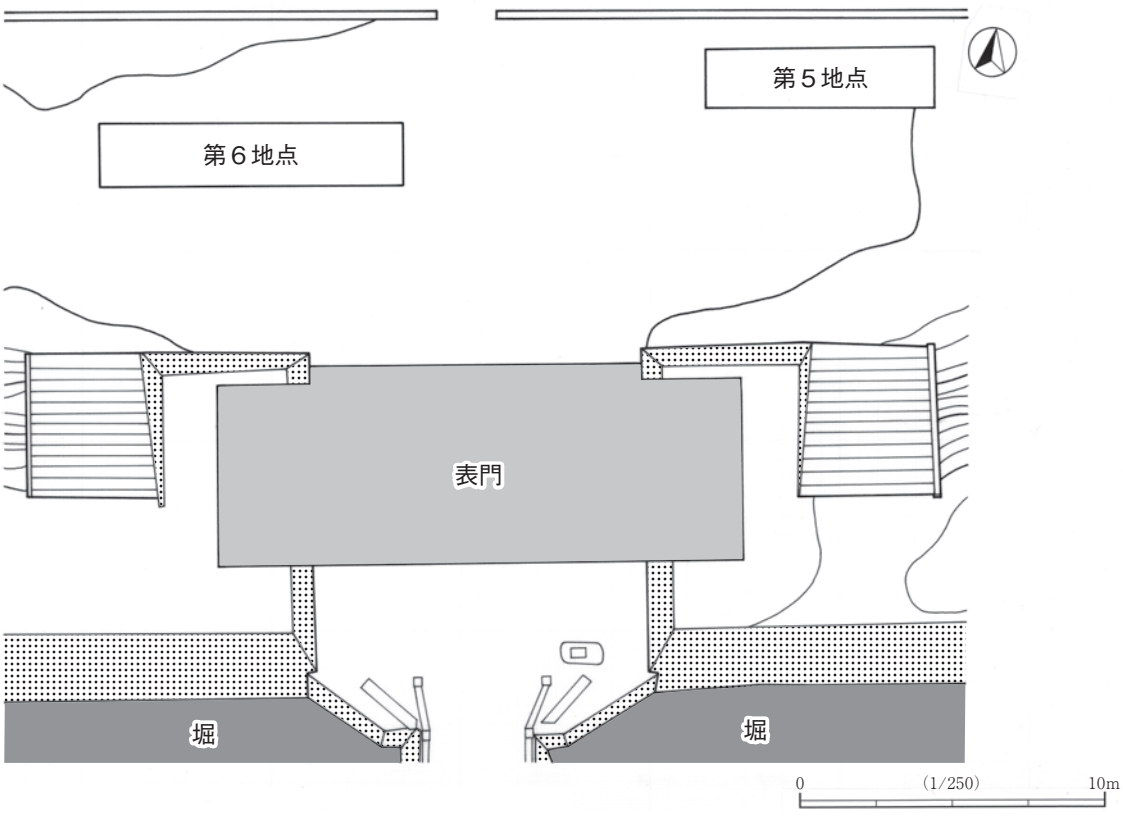
１　調査区の設定と遺構確認

調査区の設定（第８図）　第５地点は、本丸の南側に位置する表門の内側にあたる。新設する石碑の基礎部分について発掘調査を実施した。調査区は幅1.9ｍ、長さ7.5ｍで、２ｍごとに区切ったグリッドを設定し、西側から１～４グリッドとした。

基本土層（第９図下）　１～３グリッドは、近代以降の攪乱が著しく、現地表面から深さ80cm まで、近世以前の土層は残っていなかった。同所は、旧陸軍時代に弾薬庫が置かれ、その防爆壁が設けられていた場所にあたる（井上1994）。これらの攪乱は、この造成･撤去に関連したものと考えられる。このため、攪乱の影響が小さい調査区東端部の４グリッド東壁面で土層の堆積を観察した。ただし、地表下80cm では地山に達しなかったため、サブトレンチを掘削して土層確認を行った。

Ⅰ層は現表土で、砕石のほかに現代の瓶･缶などを含む。Ⅱ層は近代以降の造成土で、コンクリート片に混じって近世瓦を含む。Ⅲ層は褐灰色土で、上層に比べしまりが弱い。旧陸軍時代の整地層の可能性がある。Ⅳ層は地山ブロックを多く含む層で、南側へ落ち込む遺構の埋土と考えられる。Ⅴ層はⅣ層の底部に沿って斜面堆積した層で、炭化物を多く含む。Ⅳ層と同じ遺構の埋土といえる。Ⅵ層は、Ⅳ層及びⅤ層の下で掘り込まれた層で、遺構の埋土と考えられる。Ⅳ層～Ⅵ層から遺物は出土しなかった。Ⅶ層は淡黄色砂の地山である。

遺構確認（第９図上）　上述のとおり、１～３グリッドでは調査深度までで遺構は確認できなかった。一方、



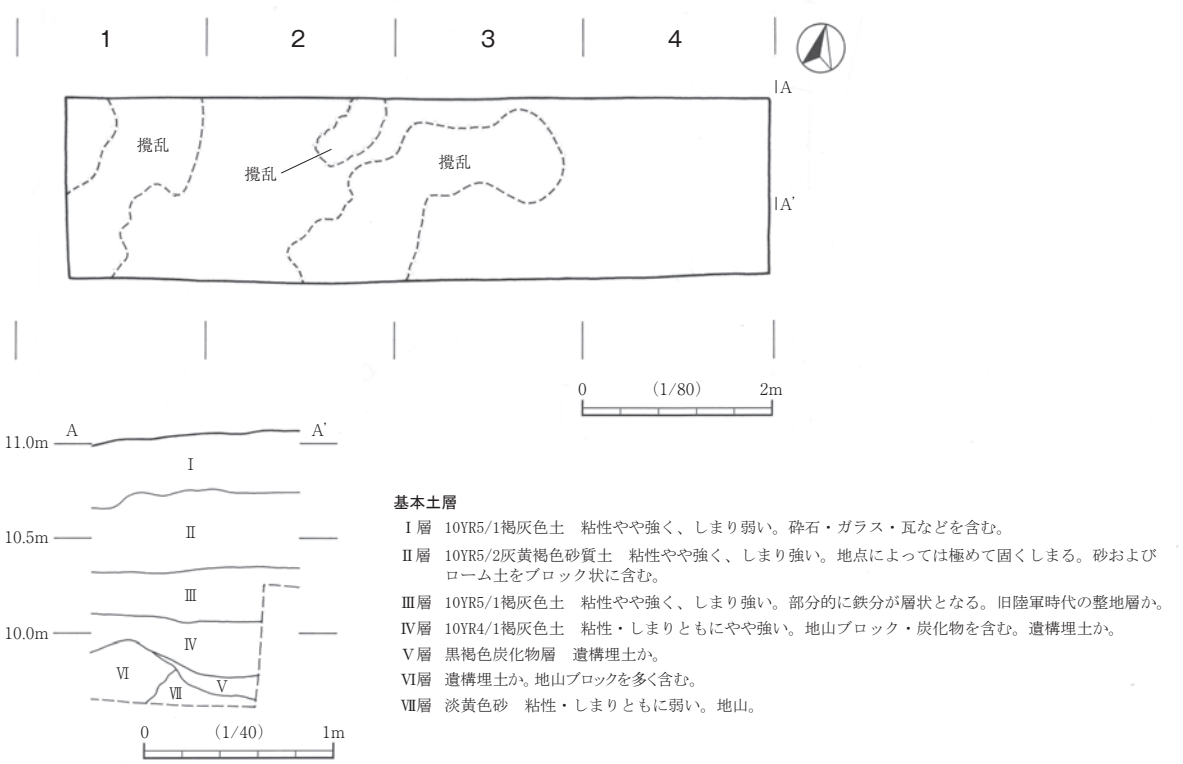
第８図　第５・６地点の位置

４グリッドにおいては、遺構と思われる土層を確認している。ただし、この土層は調査掘削深度以下に設定したサブトレンチでの検出のため、この遺構の平面形状や性格は不明である。

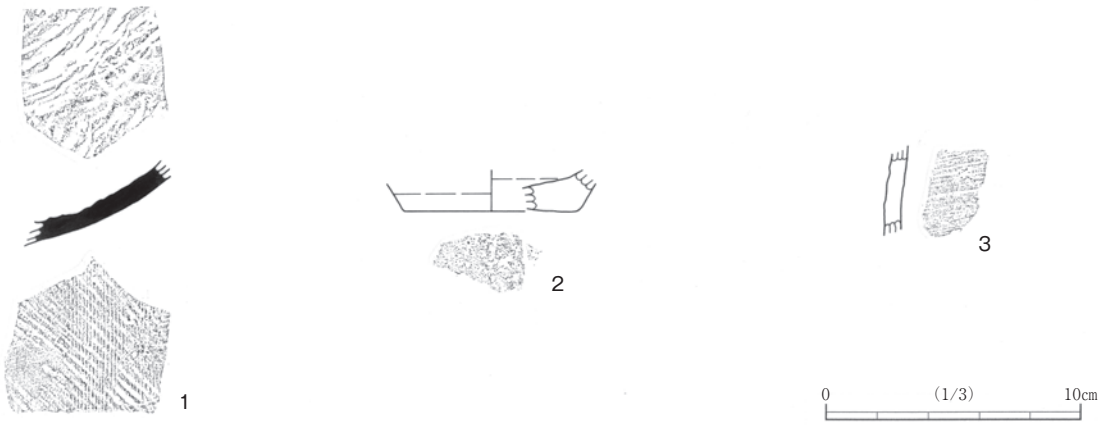
２　遺　　物

出土遺物には古代から近世の土器･陶磁器があり、その量は浅箱0.2箱分である。但し、出土層位は明らかではない。土器･陶磁器は、細片が非常に多く、図化できるものは限られていた。

１は在地窯産の須恵器横瓶である。外面にはカキメが施される。２は土師器小甕である。ロクロ成形で、底部外面には回転糸切り痕が残る。二次焼成により、器面に赤化が認められる。３は土師器長甕である。ロクロ成形で、内面はロクロナデのみで、外面にはカキメが施される。内面にはコゲとみられる炭化物が付着している。



第９図　第５地点の平面図と基本土層



第10図　第５地点出土の土器

第Ⅴ章　第６地点の調査

１　調査区の設定と基本土層

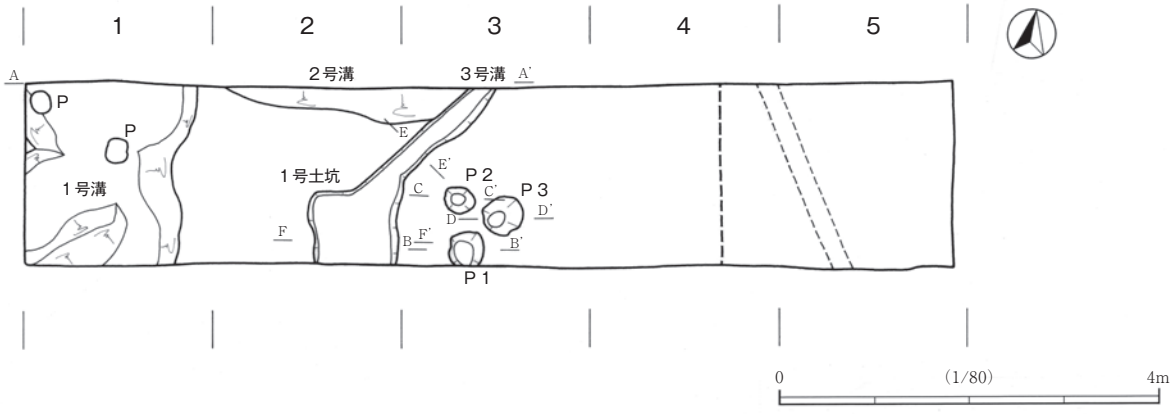
調査区の設定　第６地点は、本丸の南側に位置する表門の内側にあたる（第８図）。排水用の暗渠枡設置に伴い発掘調査を実施した。調査区は幅1.9ｍ、長さ10ｍで、２ｍごとに区切ったグリッドを設定し、西側から１～５グリッドに分けた（第11図）。なお、４～５グリッドにかけて、Ⅳ層中に水道管が埋設されていたため、管の部分は掘削を停止した。

基本土層（第12図上）　調査区の北側壁で土層を観察した。本調査区は第５地点に比べて、攪乱の度合いは低い。Ⅰ層は表土で、砕石を多く含む現代の整地層である。Ⅱ層は炭化物を少量含む砂質土で、中世から近世の遺物が出土している。Ⅲ層からⅧ層までは、砂質土と粘質土が厚さ５～10cm 程度で互層状に重なる。Ⅲ層とⅧ層は極めて固くしまる。これらの状況からⅢ層からⅧ層までは時期不詳ながら整地層と考えたい。なお、Ⅴ層上面から土師質土器の皿が出土した。Ⅸ層は黒色粘質土で、調査区の西側部分で面的に広がるが、層厚は薄い。多量の炭化物と少量の焼土ブロックを含む。Ⅹ層は黄灰色砂質土で、上面においてピット３基を検出した。ⅩⅡ層は炭化物を多く含む黒褐色粘質土で、部分的に薄く堆積する。続くⅩⅢ層からは中世の遺物が出土している。ⅩⅣ層は自然堆積のにぶい黄色シルトで、地山である。調査では、Ⅹ層上面とⅩⅣ層上面を遺構確認面として精査し、以下の遺構を検出した。

２　遺　　構

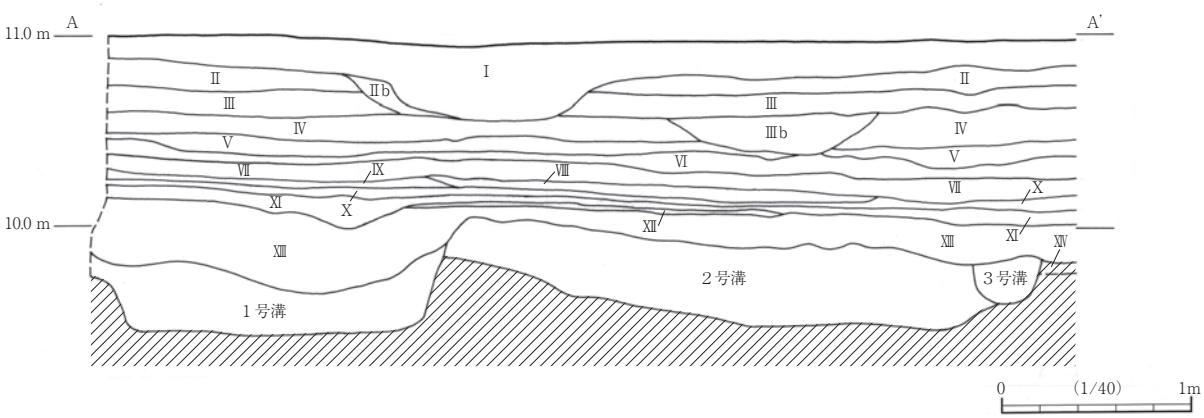
第１面の遺構（第12図下）　Ⅹ層上面を遺構確認の第１面として精査した結果、３グリッドでピット３基（Ｐ１～３）を検出した。３基は１×１ｍの範囲内に密集し、いずれも直径が30cm強、深さが50cm強である。埋土はいずれも地山ブロックを主体とし、土層中央部でやや粘性が弱い傾向がある。

第２面の遺構（第12図下）　ⅩⅣ層の地山上面を遺構確認の第２面として精査した結果、１～３グリッドで溝３条、土坑１基、ピット２基を検出した。１号溝は１グリッドに位置する。遺構確認面では幅２ｍ弱の大型の溝と思われたが、掘り下げた結果、複数の細い溝が重なり合ったものと考えられる。埋土は、地山ブロックを多量に含む単層で、上部で焼土ブロックが若干混入する。珠洲焼･土師質土器が出土した（第13図１･２）。２号溝は調査区北側壁際で検出した。平面形状は不明だが、上端が直線状なことから溝とした。断面観察の結果、２号



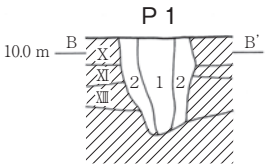
第 11 図　第６地点の平面図

溝が１号溝に先行する。また、西端は３号溝に壊されていることから、本遺構の方が時期は古い。３号溝は幅30cm 以下の狭い直線状の溝で、南西側で１号土坑と重複する。ただし、土層による先後関係は把握できなかった。単層の埋土からは須恵器の小片が出土した。１号土坑は、方形の平面形で、断面形は深さ15cmの浅い皿状である。砥石１点が出土している。このほか１号溝の底面で小型のピットを２基検出したが、湧水が著しく詳細な記録は作成できなかった。

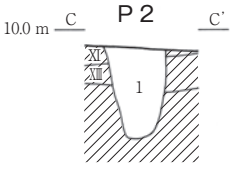


基本土層

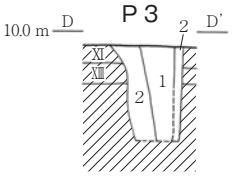
Ⅰ層　10YR4/1灰褐色土　粘性弱く、しまり極めて強い。上層で砂利、下層で砕石を多く含み、固くしまる。表土。
Ⅱ層　10YR5/4にぶい黄褐色砂質土　粘性やや強く、しまり強い。山砂を多く、炭化物を少量含む。
Ⅱb層　2.5Y2/2暗灰黄色土　粘性やや弱く、しまり極めて強い。
Ⅲ層　2.5Y5/2暗灰黄色土　粘性やや強く、しまり極めて強い。細砂を多く含み鉄分がシミ状となる。この層以下からは現代のごみなどは出土しない。
Ⅲb層　2.5Y5/3黄褐色粘質土　粘性・しまりともにやや強い。砂粒を少量含む。
Ⅳ層　2.5Y5/3黄褐色砂質土　粘性やや強く、しまり強い。粗砂を多く含み小礫を少量含む。下部に黄灰色砂シルトブロックを含む。
Ⅴ層　2.5Y5/3黄褐色砂質土　粘性弱く、しまりやや強い。粗砂を多く含み暗灰色土ブロックを少量含む。上面で土師質土器が出土。
Ⅵ層　2.5Y5/3黄褐色シルト　粘性やや強く、しまり強い。炭化物を少量含む。
Ⅶ層　2.5Y7/3淡黄色砂層　粘性・しまりともに弱い。
Ⅷ層　2.5Y4/1黄灰色砂質土　粘性弱く、しまり強い。
Ⅸ層　2.5Y2/1黒色粘質土　粘性・しまりとも強い。炭化物を多量、焼土ブロック及び砂粒を少量含む。調査区の西側部分で面的に広がる。
Ⅹ層　2.5Y4/1黄灰色砂質土　遺構確認面第1面。粘性やや強く、しまり強い。砂粒を含む。
ⅩⅠ層　2.5Y4/2暗黄灰色砂質土　粘性やや強く、しまり強い。炭化物を少量、粗砂を多量含む。
ⅩⅡ層　2.5Y3/1黒褐色粘質土　粘性・しまりともに強い。炭化物を多く含む。部分的に薄く堆積する。
ⅩⅢ層　10YR4/1褐灰色粘質土　粘性強く、しまり弱い。黄褐色ブロックを微量、炭化物を少量含む。中世の遺物を包含する。
ⅩⅣ層　2.5Y6/3にぶい黄色シルト　粘性やや強く、しまり強い。地山。
１号溝　2.5Y4/1黄灰色粘質土　粘性強く、しまり弱い。黄褐色ブロックを多く、炭化物を少量含む。上部で焼土ブロックを含む。
２号溝　2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粘性強く、しまり弱い。黄灰色ブロックを少量、炭化物を微量含む。中世の遺物が出土する。
３号溝　2.5Y4/1黄灰色粘質土　粘性やや強く、しまり強い。炭化物を微量含む。



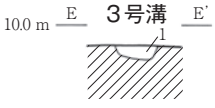
P１
１層　10YR5/3にぶい黄褐色砂質土
粘性弱く、しまりやや弱い。
２層　10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
粘性やや強く、しまりやや弱い。
暗褐色土ブロックを含む。



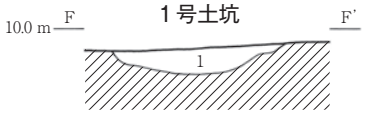
P２
１層　2.5Y6/3にぶい暗黄灰色粘質土
粘性・しまりともにやや強い。
炭化物を含む。



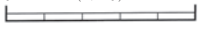
P３
１層　10YR4/3にぶい黄褐色砂質土　粘性弱い。
２層　10YR5/3黄褐色粘質土　粘性やや強く、しまりやや弱い。
暗褐色土ブロック・炭化物を斑状に含む。



３号溝
１層　2.5Y4/1黄灰色粘質土　粘性やや強く、
しまり強い。炭化物を微量含む。



１号土坑
１層　2.5Y5/3黄褐色粘質土　粘性やや強く、しまり弱い。
黄褐色ブロックを少量含む。



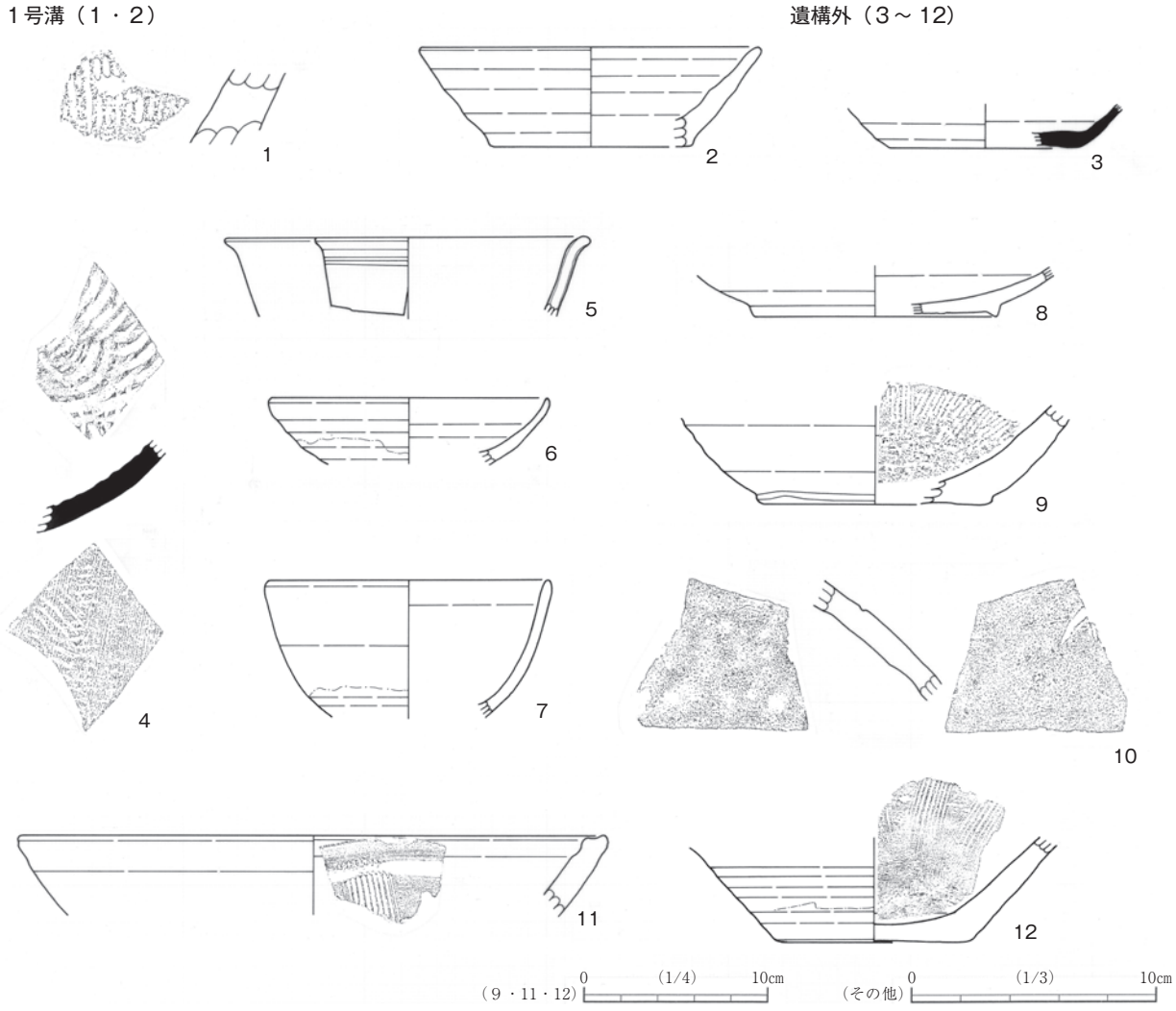
第12図　第６地点の基本土層と遺構断面図

3　遺　　物

出土遺物には古代から近代にかけての陶磁器があり、その量は浅箱0.5箱分である。そのほかに、石製品（砥石）や金属製品（和釘）もわずかに出土した。本稿では、時期が分かるものを中心に抽出し、図化した。

1号溝（第13図1・2）　1は珠洲の片口鉢である。内面には卸目が認められる。胎土は砂質またはシルト質が強く、針状の海綿骨片が含まれている。焼成によりやや発泡した仕上がりで、ざらついた質感である。2は土師質土器の皿である。ロクロ成形で、口縁部に向かって直線的に立ち上がる。

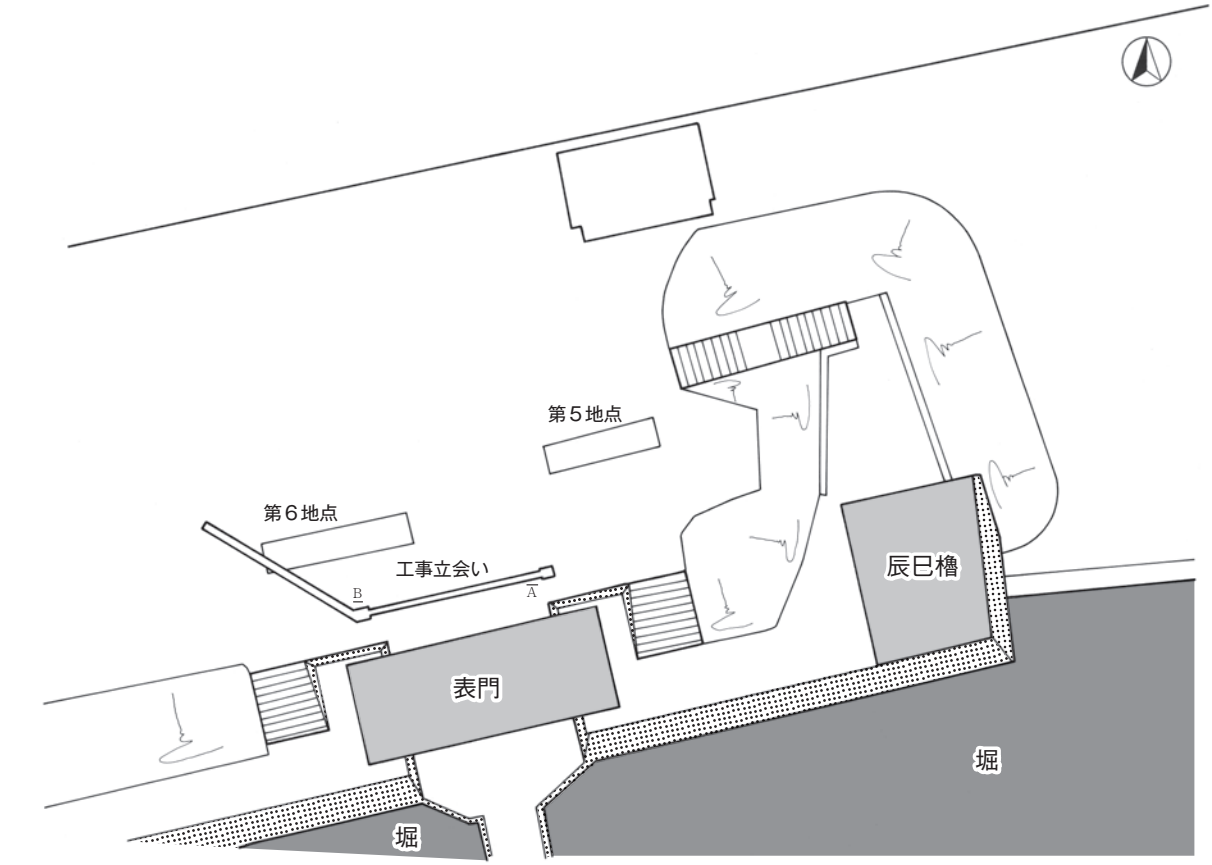
遺構外出土（第13図3～12）　3・4は佐渡小泊窯産の須恵器である。3は無台杯で、底部外面には回転ヘラ切り痕が認められる。4は横瓶で、外面にカキメが施される。5は青磁の厚釉端反碗である。上田分類（上田1982）のD－Ⅱ類にあたり、東北日本海沿岸地域では1430年以降に流通が認められる（水澤2004）。6は瀬戸美濃の縁釉小皿で、古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期（14世紀末～1430年代）とみられる（藤澤2008）。7・8は瀬戸美濃の大窯製品（第1段階：1480～1530年頃）で、7は丸碗、8は皿である（愛知県史編さん委員会2007）。9・10は珠洲で、9は片口鉢、10は壺（T種）である。11は越前の擂鉢である。口縁直下に沈線が巡り、擂目は沈線を越えて引かれている。時期は1550～1600年（V3期）と考えられる（木村2016）。12は産地不明の陶器の擂鉢で、外面に鉄釉が施されるが、底部は無釉である。時期は19世紀後半以降とみられる。

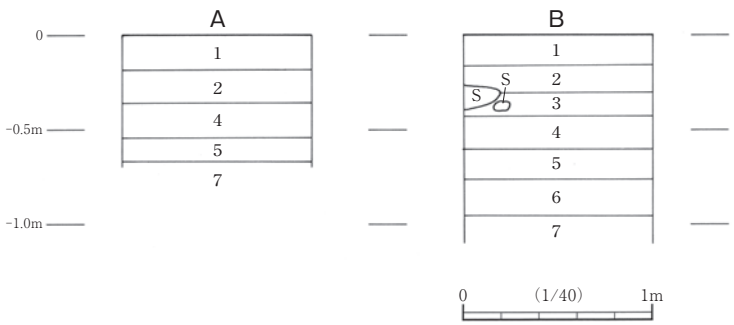


第13図　第6地点出土の土器・陶磁器

4　隣接地 工事立会いの成果

第Ⅱ章１で述べたとおり、新発田城址公園表門内 排水対策工事による排水溝設置工事の立会い調査を実施した。工事による掘削は幅１ｍであったため、本調査は実施せずに工事の掘削時に観察と記録作成を行った。掘削位置は表門の内側に近接する場所で、表門の梁と平行したのちに北西に斜行する。この斜行部分で第６地点を横断する。掘削深度は70～110㎝ほどで、概ね第６地点と同様の状況で、整地層が広がると判断できる。３層（第６地点のⅢ層）からは、厚さ25cm、大きさ70cm ほどの礫が、平担面を上に向け３つ並んで出土した。その下部からは拳大の礫が敷かれたような状態で出土した。この箇所は、『新発田御城中御間柄全図』（新発田古地図等刊行会1977）に描かれた敷石状施設の場所にあたり、これと関連性がうかがえる。





基本土層

１層　10YR4/4褐色混砂礫土　表土。現代の整地層。

２層　10YR4/3にぶい黄褐色砂　しまり極めて強い。直径5㎜のシルトブロック、直径3cmの小円礫、瓦片を含む。

３層　10YR4/3にぶい黄褐色砂　直径3cmほどのシルトブロックを多く含む。上面で扁平礫を検出し、層中に栗石状の小円礫を含む。

４層　10YR6/4にぶい黄橙色粘土　ラミナ状に砂層を挟む。

５層　10YR5/2灰黄褐色混シルト砂　シルトブロックを多く、炭化物を少量含む。

６層　10YR5/2灰黄褐色砂　シルトブロックを少量含む。底面に2cmほどの厚さで褐鉄鉱がみられる。

７層　10YR6/3にぶい黄橙色砂　川砂。地山か。

第 14 図　表門内排水対策工事の立会い調査範囲と土層模式図

第Ⅵ章　ま　と　め

新発田城跡は、加治川旧扇状地の扇央部に位置し、南西に新発田川、北東には中田川などの小河川が流れ、扇状地の中でも小高い場所に立地している。新発田城は、本丸、二ノ丸、三ノ丸からなり、今回報告した調査区（第４～６地点）は本丸に位置する。本丸は堀や土塁（総石垣･腰巻石垣部分を含む）に囲まれ、その内側には本丸御殿を構成する殿舎が建てられており、書院や広間は政治や儀式の場、居間や休息は藩主らの日常生活の場となっていた。本丸御殿は明治初年に取り壊されたが、その様子は明治初年に撮影された写真[註1)]や絵図からうかがうことができ、本丸御殿の建物配置を記した絵図として『新発田御城中御間柄全図』（新発田古地図等刊行会1977）がある。この絵図を参考にすると、第４地点は長局（御殿女中の住居）と呼ばれる長屋の西側に、第５地点は物頭番所･下番所に、第６地点は藩主御殿玄関前の広場にあたる。最後に、各地点の調査結果を振り返り、まとめとしたい。

第４地点では、地表下50～75㎝の深さで整地層を捉えたが、建物跡や土坑は検出されず、石垣背面盛土の堆積を確認したのみである。背面盛土には遺物が含まれていなかったことから、盛土の構築時期を明らかにすることはできなかった。なお、出土層位が不明ながら中世の陶磁器が出土したことから、周辺での中世の遺構の存在をうかがわせた。一部、整地層よりさらに60㎝ほど掘り下げを行ったが、遺物は出土せず、砂とシルト質土が堆積していたのみであった。

第５地点では、調査深度が70㎝で、旧陸軍時代の整地層までしか掘削しなかったため、近世以前の遺構を検出することはできなかった。ただし、それより下の堆積状況を把握するために、一部掘り下げたところ、整地層であるⅢ層の下に溝や土坑と考えられる遺構が存在することが分かった。遺物が出土しなかったことから、遺構の時期は不明だが、遺構の検出レベルが標高9.9m で、第６地点の中世の遺構検出レベルと極めて近いことを考えると、遺構の時期は中世の可能性が考えられる。

第６地点では、遺構確認面が２面あり、地表下80㎝の深さで第１面を、地表下110㎝の深さで第２面（中世）を確認した。中世の遺構検出レベルは標高10.0ｍ前後である。これまでの新発田城跡の調査では、特に二ノ丸の北側で中世の遺構が多数検出されているが（新発田市教育委員会1997･2001）、第５･６地点の結果及び工事立会の内容を踏まえると、本丸内においても近世の整地層が存在した可能性が高く、さらにその下に中世の遺構が存在していることが明らかとなった。

今回の調査では、いずれの地点も調査範囲が狭小であること、また掘削深度も限られていたことから、検出した遺構は非常に少なく、また古代から近世の遺物が出土したものの、遺跡の性格を考察するまでには至らなかった。なお、新発田城跡は近代以降に旧陸軍省の新発田営所の影響下にあったことから、その後の土地利用について、比較的情報が残っている。本丸をみると、『旧新発田城絵図』（明治７年作成、新発田市歴史図書館所蔵）には、新発田営所に関わる病室が描かれている。また、昭和20年の終戦時には被服庫、弾薬庫及びそれに伴う防爆壁の土塁が存在していた（井上1994）。

本丸は近代以降の開発による攪乱が著しく、遺構の遺存状況は不良な地点も多いが、今回の調査結果により、中世の遺構が後世の影響を大きく受けることなく、埋没している部分もあることが判明した。

註

1） 明治初年に撮影されたとみられる、本丸御殿玄関、本丸内藩主住居及び折掛櫓の古写真が知られている（新発田古地図等刊行会1981）

引用･参考文献

愛知県史編さん委員会　2007『愛知県史』別編 窯業２ 中世･近世 瀬戸系　愛知県

阿部洋輔　1980「室町期の展開」『新発田市史』上巻　新発田市

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

井上正一　1994「米軍進駐と新発田（二）- 第二の黒船「ジープ」」『新発田郷土誌』第23号　新発田郷土研究会

大橋康二　1989「肥前陶磁」考古学ライブラリー55　ニュー･サイエンス社

小野正敏　1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

小村　弐　1980a「重家と景勝の争覇」『新発田市史』上巻　新発田市

小村　弐　1980b「新発田藩の成立」『新発田市史』上巻　新発田市

小村　弐　1980c「藩体制の整備」『新発田市史』上巻　新発田市

金子　智　1999「江戸遺跡出土資料に見る近世海鼠瓦の諸様相」『古代』第106号　早稲田大学考古学会

木村孝一郎　2016「第１章　第３節 本報告での時間軸と用語」『越前焼総合調査事業報告書』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報６　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

国土地理院　1993『1:25,000 土地条件図　新発田』　国土地理院

新発田市教育委員会　1997『新発田市埋蔵文化財調査報告第17　新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ（第７～10地点）』

新発田市教育委員会　2001『新発田市埋蔵文化財調査報告第24　新発田城跡発掘調査報告書Ⅲ（第11･12地点）』

新発田市教育委員会　2008『新発田市埋蔵文化財調査報告第38　新発田城跡発掘調査報告書Ⅴ（第19地点）』

新発田市教育委員会　2015『新発田市埋蔵文化財調査報告第54　新発田城跡発掘調査報告書Ⅹ（第26地点）』

新発田市教育委員会　2016『新発田市埋蔵文化財調査報告第55　新発田城跡発掘調査報告書Ⅺ（第13～15地点）』

新発田市古地図等刊行会　1977『新発田御城中御間柄全図』

新発田市古地図等刊行会　1981『写真集　城下町新発田』

新発田市立図書館　1983『新発田市立図書館 郷土資料目録 一集･二集合本（増補２刷）』

高橋礼弥　1979「新発田」『中部の市街古図』　鹿島出版会

藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』　高志書院

水澤幸一　2004「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』第24号　日本貿易陶磁研究会

森田克行　1984「機内における近世瓦の成立について」『摂津高槻城』　高槻市教育委員会

渡邊美穂子　2016「第Ⅱ章　第４節 新発田城跡の瓦」『新発田市埋蔵文化財調査報告第55　新発田城跡発掘調査報告書Ⅺ（第13～15地点）』　新発田市教育委員会

表1　遺物観察表

土器・陶磁器

計測値：(　)は残存値を示す。
混入物の略称：石＝石英，長＝長石，角＝角閃石，雲＝雲母，白＝白色粒子，赤＝赤色粒子，黒＝黒色粒子，海綿＝針状の海綿骨片，礫＝細礫。

掲載番号	地区	グリッド	層位	種別	器種	計測値(cm)			遺存度(X/36)		成形・調整	色調 上段：外面 下段：内面	上段：胎土色調 下段：混入物	備考 (時代,使用痕跡等)	挿図	写真図版
						口径	器高	底径	口縁	底部						
1	第4地点	4	－	青磁	線描蓮弁文碗	11.0	(2.2)	－	4	－	ロクロ成形,直線筆線描蓮弁文,青磁釉	明オリーブ灰(2.5GY7/1) 明オリーブ灰(2.5GY7/1)	灰白(5Y8/1)	15世紀後半～16世紀前半 断面に漆付着	4	－
2	第4地点	7	－	青花	碗	－	(4.0)	5.8	－	13	ロクロ成形,染付(花弁文) (内)線刻,(高台内)二重圏線内に銘	明青灰(10BG7/1) 明青灰(10BG7/1)	灰白(N8/)	16世紀末～17世紀前半	4	4
3	第4地点	4	－	青花	皿	－	(1.1)	5.7	－	7	ロクロ成形,染付	明青灰(10BG7/1) 明青灰(10BG7/1)	灰白(N8/)	16世紀後半 (高台)砂付着	4	4
4	第4地点	8	－	青花	皿	－	(2.4)	3.0	－	2	ロクロ成形,碁笥底,染付(見込み:花鳥,外面:芭蕉葉文)	明青灰(10BG7/1) 明青灰(10BG7/1)	灰白(N8/)	15世紀後葉～16世紀中葉	4	4
5	第4地点	－	排土	瀬戸美濃(大窯)	端反皿	11.0	(2.3)	－	3	－	ロクロ成形,灰釉	浅黄(5Y7/4) 浅黄(5Y7/3)	にぶい黄橙(10YR7/2) 長・黒	大窯第1段階(1480～1530年頃) (口縁)欠け,スス付着	4	4
6	第4地点	－	排土	瀬戸美濃(大窯)	端反皿	－	(2.2)	5.0	－	12	ロクロ成形,灰釉 (底外)付け高台	灰オリーブ(7.5Y6/2) 灰オリーブ(7.5Y6/2)	灰白(2.5Y8/1)	大窯第1段階(1480～1530年頃) (底外)輪ドチ跡	4	4
7	第4地点	4	－	肥前陶器	皿	21.0	(3.3)	－	4	－	ロクロ成形,灰釉 (内)鉄絵	灰白(5Y7/2) 灰オリーブ(5Y6/2)	灰白(2.5Y7/1)	17世紀前半か	4	4
8	第4地点	－	排土	肥前陶器	皿	13.1	3.4	4.4	14	14	ロクロ成形(右) (底外)削り出し(左) 藁灰釉,胎土目積み	灰黄褐(10YR6/2) 灰黄褐(10YR6/2)	にぶい橙(5YR6/4)	大橋Ⅰ期(1580～1600年代)	4	4
9	第4地点	1	－	陶器(産地不明)	皿	20.4	3.8	10.3	10	12	ロクロ成形,化粧土 (底外)削り出し高台(左) (内)鉄絵(草文)	浅黄(5Y7/3) 灰白(5Y7/2)	灰(N5/)	内面に重ね焼き痕(焼台) 19世紀後半以降	4	4
10	第4地点	6	－	陶器(産地不明)	擂鉢	35.0	(7.5)	－	2	－	ロクロ成形,鉄釉 (内)擂目12条以上一単位	暗赤褐(5YR3/3) 暗赤褐(5YR3/3)	黄灰(2.5Y4/1)	19世紀後半以降	4	4
11	第4地点	4	－	陶器(産地不明)	擂鉢	32.0	16.7	14.0			ロクロ成形,鉄釉 (底外)削り出し高台 (内)擂目13条以上一単位	暗赤褐(5YR3/2) にぶい赤褐(5YR4/3)	にぶい橙(5YR6/4) 長・白・黒	内面に重ね焼き痕 19世紀後半以降	4	－
1	第5地点	4	－	須恵器	横瓶	－	(3.4)	－	－	－	叩き成形 (外)カキメ	灰褐(7.5YR5/2) 灰黄褐(10YR5/2)	灰(N6/) 石・長・黒	在地窯産	10	6
2	第5地点	－	－	土師器	小甕	－	(1.6)	6.8	－	7	ロクロ成形 (底外)回転糸切り	にぶい橙(2.5Y6/4) にぶい橙(5Y7/4)	にぶい橙(2.5Y6/4) 石・長・雲・礫	二次焼成を受け赤化	10	－
3	第5地点	－	－	土師器	長甕	－	(3.5)	－	－	－	ロクロ成形 (外)カキメ	灰黄褐(10YR6/2) 灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR6/2) 石・長・角・礫	(内)炭化物付着	10	－
1	第6地点	1号溝	－	珠洲	片口鉢	－	(3.0)	－	－	－	ロクロ成形 (内)卸目	灰(5Y4/1) 灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1) 海綿・礫		13	6
2	第6地点	1号溝	－	土師質土器	皿	13.8	4.1	8.0			ロクロ成形	浅黄橙(7.5YR8/3) にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5Y7/4)		13	6
3	第6地点	－	－	須恵器	無台杯	－	(1.8)	7.8	－	5	ロクロナデ(左) (底外)回転ヘラ切り	灰(N6/) 灰(N6/)	灰(N6/) 白	佐渡小泊窯産	13	6
4	第6地点	－	－	須恵器	横瓶	－	(3.7)	－	－	－	叩き成形 (外)カキメ	黄灰(2.5Y6/1) 灰(5Y5/1)	灰黄(2.5Y7/2) 石・長・白	佐渡小泊窯産	13	6
5	第6地点	－	－	青磁	厚釉端反碗	14.6	(4.2)	－	3	－	ロクロ成形,青磁釉	オリーブ灰(5GY6/1) オリーブ灰(5GY6/1)	灰白(2.5Y7/1)	1430年以降	13	6
6	第6地点	－	－	瀬戸美濃(古瀬戸)	縁釉小皿	11.3	(2.7)	－	6	－	ロクロ成形,灰釉	オリーブ黄(5Y6/4) オリーブ黄(5Y6/3)	灰黄(2.5Y7/2) 石・長・黒	古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期（1380～1440年）	13	6
7	第6地点	－	－	瀬戸美濃(大窯)	丸碗	11.4	(5.7)	－	1	－	ロクロ成形,灰釉	灰白(7.5Y7/2) 浅黄(7.5Y7/3)	灰白(2.5Y8/2)	大窯第1段階(1480～1530年頃)	13	6
8	第6地点	－	－	瀬戸美濃(大窯)	皿	－	(2.1)	10.0	－	7	ロクロ成形,灰釉 (底外)削り出し高台	浅黄(5Y7/4) オリーブ黄(7.5Y6/3)	灰白(5Y8/1)	大窯第1段階(1480～1530年頃) (底外)輪ドチ跡か	13	6
9	第6地点	－	－	珠洲	片口鉢	－	(5.4)	12.0	－	6	ロクロ成形 (内)卸目7条以上一単位	灰(N6/) 灰(N4/)	灰(N6/) 石・長・黒・海綿	焼き歪みわずか (内)摩耗・炭化物付着 (底外)摩耗	13	6
10	第6地点	－	－	珠洲	壺(T種)	－	(5.0)	－	－	－	叩き成形 (外)刻文「×」か	灰(N4/) 灰(N4/)	灰(N5/) 石・長・礫		13	6
11	第6地点	－	－	越前	擂鉢	32.0	(4.4)	－	4	－	ロクロ成形 (内)沈線・擂目10条一単位	灰黄褐(10YR6/2) 褐灰(7.5Y6/1)	灰褐(7.5YR6/2) 石・長・白色礫	Ⅴ3期(1550～1600年)	13	6
12	第6地点	－	－	陶器(産地不明)	擂鉢	－	(5.8)	10.4	－	8	ロクロ成形,鉄釉 (底)回転糸切り (内)擂目11条一単位	灰褐(5Y4/2) 灰褐(5Y4/2)	にぶい橙(7.5YR7/3) 石・長・赤・黒・礫	19C後半以降 (内)摩耗顕著	13	6

瓦（1）

計測値：[ ]は推定値，( )は残存値を示す。

掲載番号	地区	グリッド	層位	種別	器種	計測値(cm)	瓦当文様(分類)・調整	色調	胎土	備考	挿図	写真図版
12	第4地点	1	−	黒瓦	軒丸瓦	瓦当部:瓦当径16.1/瓦当厚1.5/文様区径11.3/周縁厚0.9 丸部:全長(21.2)/胴部長(21.2)/胴部幅15.9/胴部高7.4/胴部厚2.1/玉縁長−/玉縁幅−/玉縁高−	瓦当文様:連珠三巴文(16珠b種①) 瓦当部・丸部接合方法:接合用粘土広 丸部凸面:ケズリ後縦方向ミガキ,釘穴1ヵ所,刻印「八弁花」 丸部凹面:布目(刺縫い圧痕),タタキ 面取り:胴部凹面側縁	灰 (10Y5/1)	灰白 (5Y7/1) 硬質		5	4
13	第4地点	6	−	黒瓦	軒丸瓦	瓦当径[14.6]/瓦当厚2.7/文様区径[10.2]/周縁厚0.7	瓦当文様:連珠三巴文(16珠b種②か) 接合部:カキヤブリ痕	灰 (5Y6/1)	灰白 (5Y8/1) やや軟質		5	4
14	第4地点	1	−	黒瓦	軒丸瓦	瓦当径[12.0]/瓦当厚2.6/文様区径8.5/周縁厚0.7	瓦当文様:連珠三巴文(10珠) 瓦当部:キラコ(離れ砂痕)	灰 (7.5Y6/1)	灰白 (5Y7/1) 硬質		5	4
15	第4地点	6	−	赤瓦	軒丸瓦	瓦当径[14.8]/瓦当厚2.2/文様区径[10.2]/周縁厚0.9	瓦当文様:三巴文	暗赤灰 (7.5R4/1) 施釉	にぶい橙 (7.5YR7/4) 硬質		5	4
16	第4地点	1	−	黒瓦	軒丸瓦	全長33.5/胴部長29.2/胴部幅(12.0)/胴部高8.3/胴部厚2.3/玉縁長4.3/玉縁幅(8.3)/玉縁高5.1	瓦当接合部:カキヤブリ痕 凸面:ケズリ後縦方向ミガキ,釘穴1ヵ所 凹面:コビキB,布目(刺縫い圧痕),タタキ 面取り:胴部凸面上端,玉縁凹面上端	灰 (N6/)	灰白 (5Y8/1) やや軟質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	5	4
17	第4地点	6	−	黒瓦	軒平瓦	瓦当幅(12.6)/瓦当高4.8/瓦当厚2.2/文様区幅(7.8)/文様区高2.3/周縁厚0.5	瓦当文様:8の字状文(b種か) 瓦当部:キラコ(離れ砂痕) 瓦当部・平部接合方法:ナナメソギ接合 接合部:カキヤブリ痕	灰 (N5/)	灰白 (2.5Y7/1) 硬質		5	4
18	第4地点	1	−	赤瓦	軒平瓦	瓦当幅(11.4)/瓦当高(3.6)/瓦当厚2.1/文様区幅(11.4)/文様区高2.8/周縁厚0.6	瓦当文様:菊文 瓦当部・平部接合方法:凸面接合 接合部:カキヤブリ痕	にぶい橙 (5YR6/4) 施釉	にぶい橙 (7.5YR7/3) 硬質		5	4
19	第4地点	2	−	黒瓦	丸瓦	全長(22.6)/胴部長22.6/胴部幅12.7/胴部高6.1/胴部厚1.8/玉縁長−/玉縁幅−/玉縁高−	凸面:ケズリ後縦方向ミガキ 凹面:布目(刺縫い圧痕),タタキ 面取り:胴部凸面上端・側縁,胴部凹面側縁	灰 (N6/)	灰白 (2.5Y7/1) 硬質		5	5
20	第4地点	2	−	黒瓦	丸瓦	全長(20.3)/胴部長(16.8)/胴部幅(8.6)/胴部高6.6/胴部厚1.8/玉縁長3.5/玉縁幅(8.8)/玉縁高2.2	凸面:ケズリ後縦方向ミガキ,釘穴1ヵ所 凹面:布目(刺縫い圧痕),吊り紐痕,タタキ 面取り:胴部凸面上端・側縁,玉縁凹面上端	灰 (N6/)	灰 (N5/) 硬質	玉縁側縁のみ面取り	5	−
21	第4地点	1	−	黒瓦	丸瓦	全長(22.2)/胴部長(17.7)/胴部幅15.7/胴部高7.0/胴部厚2.2/玉縁長4.5/玉縁幅14.6/玉縁高4.0	凸面:ケズリ後縦方向ミガキ,釘穴1ヵ所 凹面:布目(刺縫い圧痕),吊り紐痕,タタキ 面取り:胴部凸面上端・側縁,玉縁凹面上端	灰 (7.5Y6/1)	灰白 (2.5Y8/1) やや軟質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	6	−
22	第4地点	2	−	黒瓦	丸瓦	全長(20.5)/胴部長(16.8)/胴部幅(9.2)/胴部高6.1/胴部厚2.0/玉縁長3.7/玉縁幅(4.9)/玉縁高(2.7)	凸面:ケズリ後縦方向ミガキ 凹面:コビキB,布目(刺縫い圧痕),タタキ 面取り:胴部凸面側縁,胴部凹面側縁,玉縁凹面上端	灰 (N4/)	灰黄 (2.5Y7/2) やや軟質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	6	−
23	第4地点	1	−	黒瓦	丸瓦	全長(16.3)/胴部長(12.6)/胴部幅(13.4)/胴部高7.6/胴部厚2.5/玉縁長(3.7)/玉縁幅(8.5)/玉縁高5.8	凸面:ケズリ後縦方向ミガキ,刻印「芯持ち八弁花」 凹面:布目(刺縫い圧痕),タタキ 面取り:胴部凸面上端・側縁	灰 (N5/)	灰黄 (2.5Y7/2) 硬質		6	5
24	第4地点	2	−	黒瓦	丸瓦	全長(15.2)/胴部長(11.5)/胴部幅(11.2)/胴部高6.5/胴部厚2.1/玉縁長3.7/玉縁幅(8.7)/玉縁高3.5	凸面:ケズリ後縦方向ミガキ 凹面:コビキB,布目 面取り:胴部凸面側縁,玉縁凹面上端	灰 (7.5Y5/1)	灰黄 (2.5Y7/2) 硬質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	6	5
25	第4地点	2	−	黒瓦	丸瓦	全長(20.0)/胴部長(15.8)/胴部幅(14.2)/胴部高7.1/胴部厚2.0/玉縁長4.2/玉縁幅(13.6)/玉縁高4.2	凸面:ケズリ後縦方向ミガキ,刻印「八弁花」 凹面:布目(刺縫い圧痕),タタキ 面取り:胴部凸面上端,玉縁凹面上端	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1) やや軟質	玉縁側縁と胴部側縁上端を面取り	6	5

瓦（２）

掲載番号	地区	グリッド	層位	種別	器種	計測値(cm)	瓦当文様(分類)・調整	色調	胎土	備考	挿図	写真図版
26	第4地点	2	－	黒瓦	平瓦	全長(12.9)/広端幅-/狭端幅(13.9)/弧深1.7/厚2.2	凸面:ナデ 凹面:ミガキ 面取り:凸面下端・側縁	灰 (5Y5/1)	灰白 (10YR8/2) 硬質		6	－
27	第4地点	2	－	黒瓦	平瓦	全長(17.8)/広端幅(14.2)/狭端幅-/弧深5.0/厚2.1	凸面:ナデ 凹面:ミガキ 側面:ミガキ・無調整(上端) 面取り:凸面側縁,凹面側縁	青灰 (5PB5/1)	灰白 (5Y8/1) 硬質		6	－
28	第4地点	3	－	黒瓦	平瓦	全長(22.4)/広端幅-/狭端幅(7.7)/弧深2.4/厚2.2	凸面:ナデ 凹面:ミガキ 面取り:凸面下端・側縁,凹面下端・側縁	黄灰 (2.5Y6/1)	灰白 (2.5Y8/2) 硬質		6	5
29	第4地点	1	－	黒瓦	平瓦	全長(24.3)/広端幅(9.6)/狭端幅-/弧深3.0/厚2.2	凸面:無調整 凹面:ミガキ 側面:ミガキ・無調整(上端) 面取り:凹面側縁	灰 (N5/)	灰白 (2.5Y8/2) 硬質		6	5
30	第4地点	2	－	黒瓦	鬼瓦	全長(25.1)/幅[39.8]/厚3.1	文様:五階菱 表面:ケズリ後ミガキ 裏面:ケズリ 側面:ミガキ・ナデ(上端) 面取り:表面側縁,裏面側縁	灰 (N4/)	灰白 (2.5Y8/1) 硬質		7	5
31	第4地点	1	－	黒瓦	熨斗瓦	全長(12.4)/幅(11.4)/厚2.1	凸面:無調整 凹面:ミガキ,平行沈線 面取り:凹面側縁	灰 (N5/)	灰白 (2.5Y7/1) 硬質		7	5
32	第4地点	1	－	黒瓦	海鼠瓦	全長(26.0)/幅(13.1)/厚2.4	表面:ミガキ,漆喰目安刻線 裏面:ミガキ 側面:ミガキ,釘固定痕1ヵ所 面取り:表面下端・側縁	灰白 (5Y8/2)	灰白 (5Y8/2) 硬質		7	5

作業風景（南から）

作業風景（北から）

作業風景（東から）

作業風景（西から）

基本土層（１グリッド）（南から）

石垣背面盛土断面（北西から）

石垣背面盛土断面（西から）

第５地点：調査区全景、基本土層、遺構、作業風景

調査区全景（西から）

基本土層（４グリッド）（西から）

遺構検出状態（北から）

作業風景（南西から）

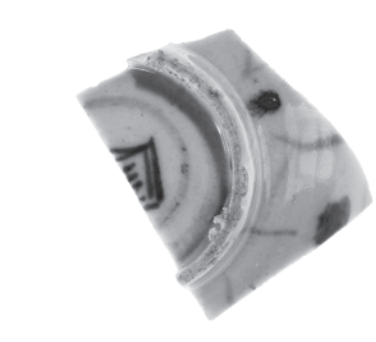
調査区全景（東から）

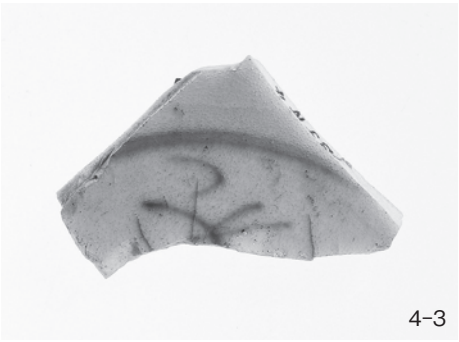
基本土層（１グリッド）（南から）

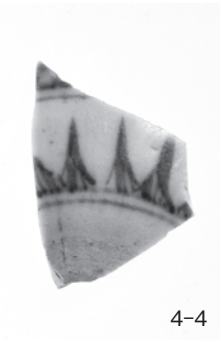
Ｐ１～３　検出状態（南から）

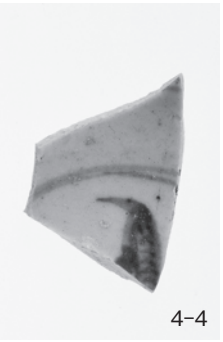
１～３号溝　完掘状態（西から）

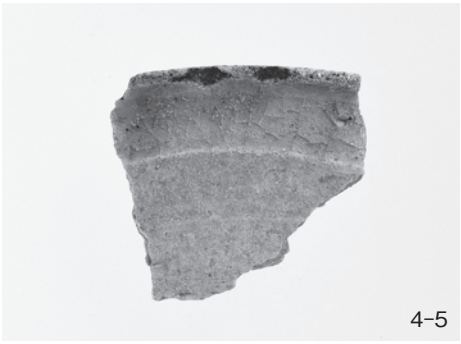
作業風景（北西から）

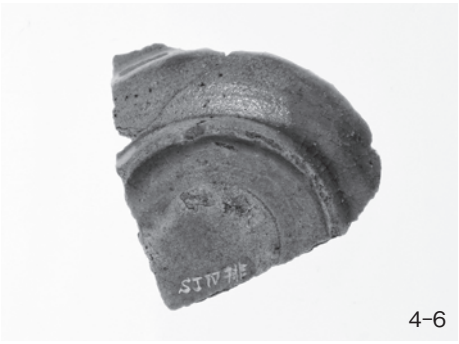

4-2

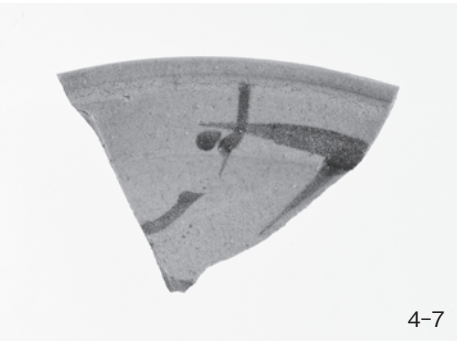

4-3


4-4

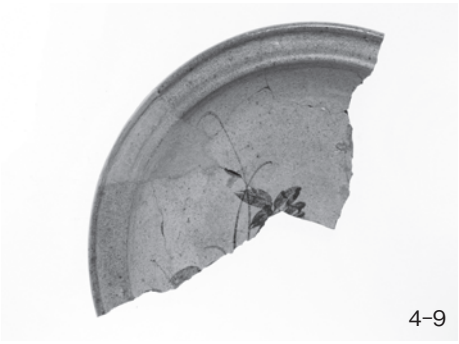

4-4

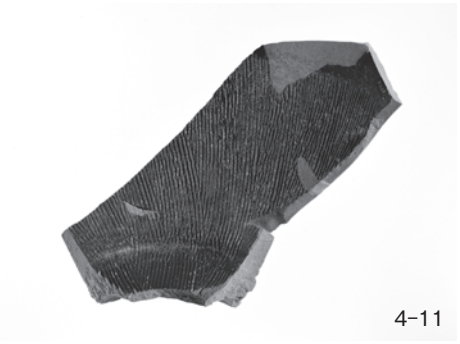

4-5


4-6


4-7

4-8


4-9


4-11

4-12

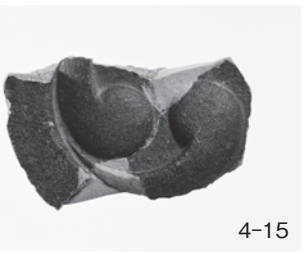
4-12

4-12

4-14

4-12 刻印

4-13


4-15

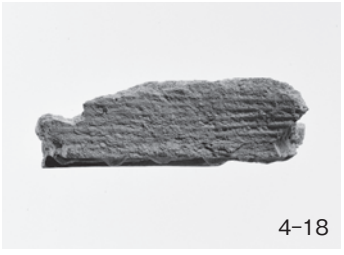
4-16

4-16

4-17

4-18

4-17


4-18

4-19

4-19

4-23

4-23

4-24

4-24

4-25

4-25

4-28

4-28

4-29

4-29

4-30

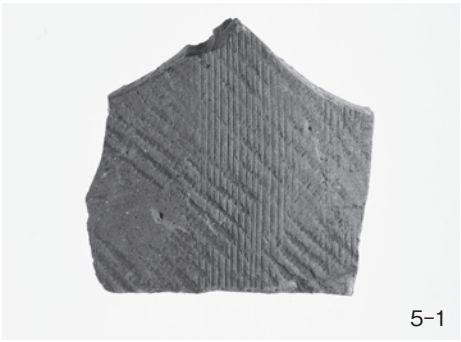
4-30

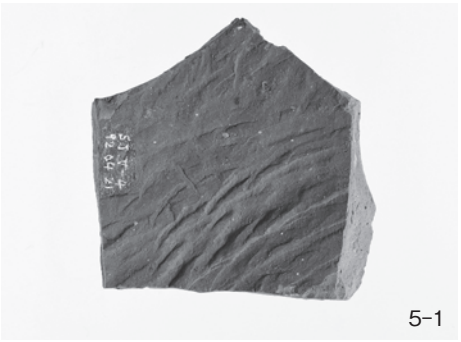
4-32

4-31

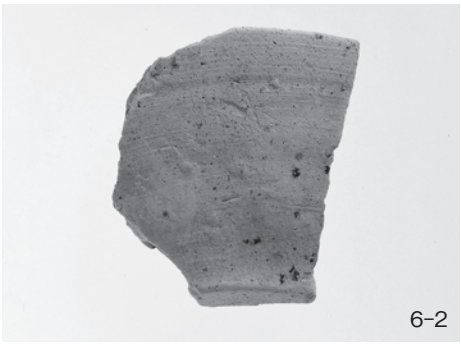
4-23 刻印

4-25 刻印

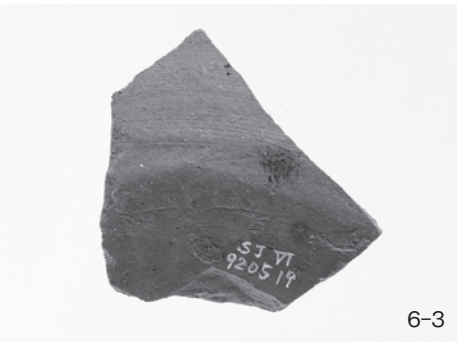

5-1

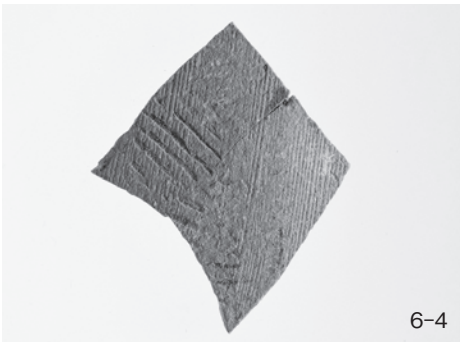

5-1

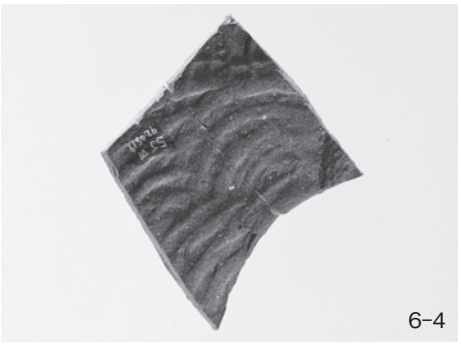
6-1


6-2

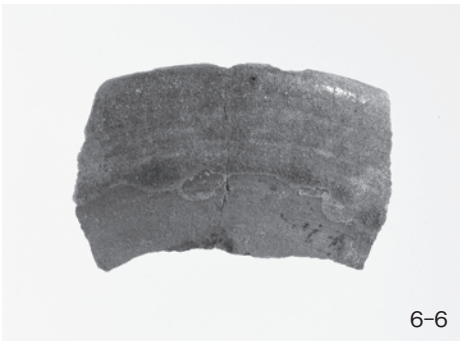
6-2

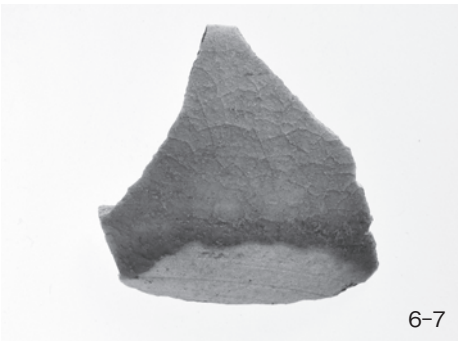

6-3

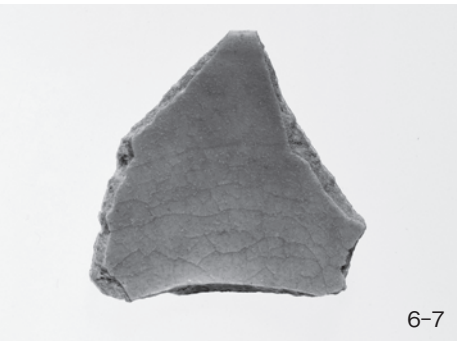

6-4


6-4

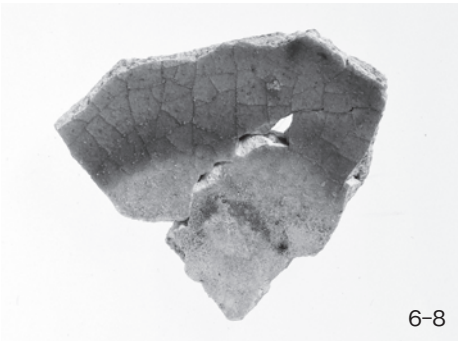
6-5

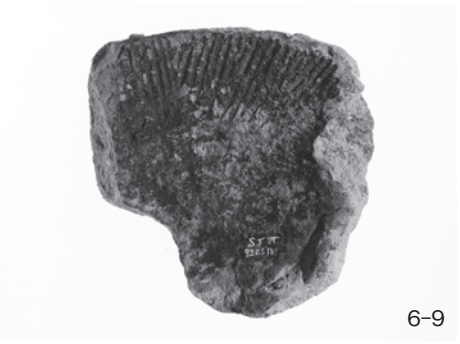

6-6

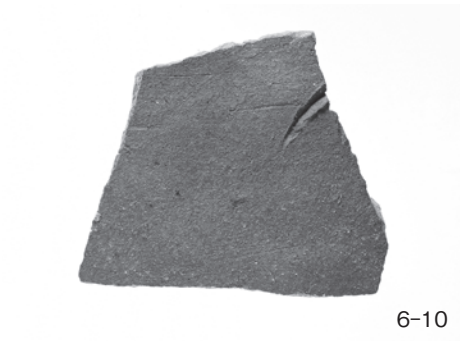

6-7

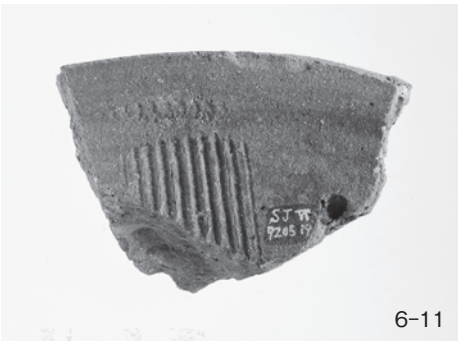

6-7

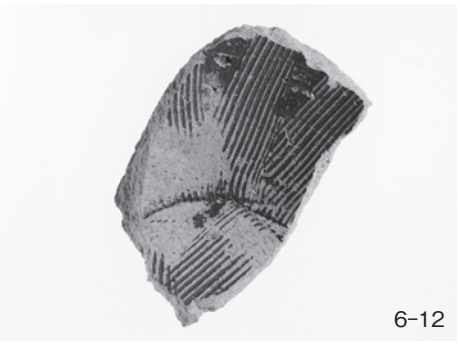
6-8


6-8


6-9


6-10


6-11


6-12

報　告　書　抄　録

ふりがな	しばたじょうあと はっくつちょうさほうこくしょ12
書名	新発田城跡 発掘調査報告書Ⅻ
副書名	第４・５・６地点
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第65
編著者名	石垣義則・鈴木　暁・酒井瑞季（新発田市教育委員会）
編集機関	新発田市教育委員会
所在地	〒959-2323　新潟県新発田市乙次281番地２　　TEL　0254-22-9534
発行年月日	令和３（2021）年８月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新発田城跡（しばたじょうあと）	新発田市大手町（しばたしおおてまち）６丁目２番	15206	92	37°57′18″	139°19′28″	19870803～19870807	第４地点 62.4㎡	第４地点 陸上自衛隊新発田駐屯地設備増設
	新発田市大手町（しばたしおおてまち）６丁目６番56			37°57′17″	139°19′33″	19920420～19920423	第５地点 18.9㎡	第５・６地点 公園整備
				37°57′17″	139°19′33″	19920518～19920521	第６地点 23.3㎡	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新発田城跡 第４地点	城館跡	平安時代 中世 近世	石垣背面盛土	中世陶磁器、 近世陶磁器・瓦	本丸御殿敷地にあたる。
新発田城跡 第５地点			なし	土師器・須恵器	
新発田城跡 第６地点			土坑１基、 溝３条、 ピット２基	土師器・須恵器、 中世陶磁器・土師質土器	

要約

新発田城跡は、加治川旧扇状地の扇央部に位置し、南西に新発田川、北東には中田川などの小河川が流れ、扇状地の中でも小高い場所に立地している。新発田城は、本丸、二ノ丸、三ノ丸からなり、本調査区（第４・５・６地点）は本丸に位置する。

調査の結果、第４地点では建物跡や土坑などは検出されなかったが、石垣背面盛土の堆積を確認した。第５地点では遺構は検出されず、平安時代の土器及び近世陶磁器が少量確認したのみである。ただし、一部深掘りを行ったところ、中世の可能性がある遺構を確認した。第６地点では遺構確認面が２面あり、中世以降の遺構と、中世の遺構を検出した。

いずれの調査区も狭小で、検出した遺構も限られていたが、本丸には中世の遺構が存在していることが分かった。

新発田城跡 発掘調査報告書Ⅻ

第４・５・６地点

発　行　令和３（2021）年８月31日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市乙次281番地２
印　刷　島津印刷株式会社

本書は、本文・図版ともに中性紙を使用しています。